



澄懷堂書畫目錄卷五

二峯 山本悌二郎纂



陳洪綬茗苑清談圖立軸

高三尺四寸

闊一尺五寸九分

絹本

淡著色畫。主客二人、石牀に對坐して茗を啜り、下に一童侍立せり。瓶花、橫琴、茶具、卷軸、皆備はる。款に「老蓮洪綬畫於青藤書屋」と云ひ、陳印洪綬、章侯の二印を鈐せり。

陳洪綬の人物畫は、倪雲林の山水と相並びて、高古絶倫、古今に獨歩せり。雲林の畫山水は古來收藏の有無に依りて、其の人の雅俗を分てり云ふ。洪綬の畫に於いても、吾は亦爾く云はんご欲す。洪綬の門弟陸子薪云はく、「師が人物を作るや、頂より踵に至り、衣摺盤旋せしめ、常に數丈一筆に鈎成し、稍も停屬せず。游鷗獨運、乘風萬里の勢あり」と。張庚云はく「洪綬の畫人物は、軀幹偉岸にして、衣紋の清圓細勁なること、公麟子昂の妙を兼有す。設色は吳生の

法を學びて、其の力量氣局の超拔磊落なること、仇唐の上に在り。蓋し三百年、此の筆墨無し」
こ。古來名流に推重せらるること此の如し。吾齋今其の眞蹟十餘件を有せり。翰墨の清福殊
に淺からざることを覺ゆ。

陳洪綬竹石文禽圖立軸

高三尺四寸五分 闊一尺六寸六分 紙本

淡著色畫。樹竹秀石に配するに長尾の白鸚鵡を以てせり。款に「洪綬」を署し、章侯の二印を鈐
せり。下角に桐陰館印の藏印あり。秦祖永の舊物なり。洪綬は畫人物に於いて、尤も盛名を擅
にすれども、花卉翎毛に於いても、亦奇古靈妙を極め、專家をして後に瞠若たらしむ。洵に其
の天分の及ぶべからざるものあるが故なり。

陳洪綬高士倚石圖立軸

高三尺九寸五分 闊一尺七寸 綾本

淡著色畫。高士石牀に箕坐し、紙を展べ筆を把りて、詩を思ふの狀を寫せり。貌神奕奕として

仙氣あり。款識に云はく、「洪綬寫、似瑞趾社盟長兄請教」を署款し、陳印洪綬、章侯の二印を鈐
せり。印大款小、その對照の奇異なる、坐に洪綬の誕僻を想はしむ。許友は曾て洪綬の畫人物に跋して「古心如鐵、秀色如波、彼復有左右手、如蘭枝蕙葉、乃有此奇
光冷響」と云へり。移して以て此の軸の題贊を爲すべし。

陳洪綬聽絃圖立軸

高三尺二寸五分 闊一尺七寸 絹本

淡著色畫。一少女、蕉葉上に絃を弾じ、一高士對坐して之を聽く。鈎線圓勁にして、遊絲古篆
の妙あり。款に云はく、「洪綬畫於白鹿山居」を署款し、陳印洪綬、章侯の二小印を鈐せり。
朱竹垞云はく、「章侯は中年酒を縱にし、妓に狎れて自放せり。客畫を求むる者ありて、罄折至
恭すとも與ふるなし。酒過、妓を召くに及んでは、輒ち自ら筆墨を索め、小夫穉子の徵索こ
雖ごも應ぜざるなし。余毎に其の眞蹟を觀るに、畫ける所の美女は、婉冶絶倫なり。今は則
ち贗本紛紜たり。多くは其の徒嚴水子、山子、司馬子雨輩の所做に係り、率ね皆籛條戚施なり」
と。門弟嚴湛の倣作は今日尙往往之に逢ふことあり。筆墨眞を亂る。鑑家の警戒を要す。

陳洪綬畫佛立軸

高一尺二寸六分

闊八寸四分

絹本

長顔朱衣の立佛、兩掌を以て一片の香水を持ち、背後蓮花を捧げて立てる者あり。上方款題に云はく、

供養十方、盡虛空界。一切佛子、悉諸香雲。云何不藝、真相如是。是名藝香、萬法俱盡。

洪綬

下に、陳印洪綬の一印を鈐せり。

陳洪綬松蔭讀書圖立軸

高四尺九寸二分

闊一尺五寸四分

絹本

淡著色畫。老松一株、垂枝翳鬱たり。下に一人坐して書を讀み、一僕琴を持ちて後ろに在り。人物と老松と相映發して俱に奇古を極む。款に云はく「洪綬畫於靜光林」云。陳印洪綬、章侯の二印を鈐せり。

陳洪綬米顛拜石圖立軸

高三尺八寸二分

闊一尺五寸七分

絹本

著色畫 奇石峻峭たる前に、一老士、長揖の狀を爲し、二僕後に從へり。款に云はく「老蓮洪綬畫於青藤書屋」云。陳印洪綬、章侯の二印を鈐せり。

毛奇齡の周亮工に與へし書に據れば、洪綬は甲申の後を以て其の名を悔遲と更めき。故に老遲と稱せり云。乃ち此の軸は明の社稷覆没後の作なるを知るべし。青藤書屋はもと徐渭が讀書の處なり。藤樹一株あり。因りて屋に名づけ、又徐渭自ら青藤道人と稱せり。屋は後、洪綬の宅となり、洪綬の歿後、徐渭は雷霆の壞つ所となれり云云。

陳洪綬梅竹雙禽圖立軸

高三尺四寸

闊一尺五寸四分

絹本

著色畫。磊塊たる石と、一樹の梅と一叢の飛白竹とを寫し、配するに朱禽二羽を以てす。圖局全く梅竹丹禽圖と相似たり。署款なしと雖も、一望して洪綬の作たるを知る。

洪綬嘗て自畫梅竹圖に識して云はく、

辛卯暮秋、老蓮以一金、得文衡山先生畫一幅、以示茂齋。茂齋愛之、便贈之。數日後、丁秋平之子病篤。老蓮借茂齋一金、以資湯藥。孟冬、老蓮以博□頁子、餉茂齋。時邸中闕米、實無半文錢。便向茂齋乞米、茂齋遺我一金。恐墜市道、作此以酬之、以矯夫世之取人之物、壹如寄焉者。

友人に古書畫を贈りて、後、錢を借り。復、書畫を贈りて、復錢を借る事は偶然なれども、其の賣買に類せんことを恐れ、遂に自ら梅竹一幅を畫きて贈れるは、此の題識の大意なり。是に由りて之を觀れば、洪綬は放誕縱恣の人にあらざりしなり。

陳洪綬書五言絕句立軸

高四尺四寸四分 闊九寸二分 紙本

草行書二行。其の詩に、

道人一壺酒。鷄亭宮秋光。半年多負卻。紅橋雙垂楊。

款に「洪綬」署款し、章侯、陳印洪綬の二印を鈐せり。書法適逸、洪綬其の人を見るが如し。

洪綬の詩書の超妙なることは、其の畫に遜らず。而も人皆其の畫を言ひて、其の詩書を言はず。靜志居詩話に曰はく、詩頗る逸致饒し。惜むらくは流傳せる者寡し。妓董飛仙に贈れる一絶に云はく、桃花馬上董飛仙。自學生綃乞畫蓮。好事日多還記得。庚申三月岳墳前。と、亡友海鹽教諭金壽の誦せし所なり。と。洪綬の詩書は、當時既に流傳多からず。今日人の之を知る者尠きは、亦惟むに足らざるなり。

陳洪綬書梅花詩立軸

高六尺三寸四分 闊一尺五寸四分 紙本

草行書三行。七言絕句一首。

雙管年來懶去精。况兼花酒念俱輕。緣何已畫梅花扇。又畫觀音贈楚生。

款に「洪綬」署し、陳印洪綬、章侯の二大印を鈐せり。右方上に蓮子の一印あり。

此の詩は寶綸堂集第九卷に見ゆ、但轉句の緣何を如何に作れり。右方下に九丹鑿藏の一印あり。即ち朱九丹の舊藏なり。又右邊幅に九丹の題記あり。云はく、

章侯先生、六法已具、無上神品。不意其書亦復清絕乃爾。此其書梅花第三絶也。風神疏朗、

筆筆均從瘞鶴銘得來。乾嘉以後、無此作矣。

檀之記

陳洪綬書咏楊鐵史詩立軸

高五尺一寸

闊一尺四寸八分

絹本

草書三行。七言絕句一首。曰はく、

數年不見張公子。忽憶玄都觀裏春。今日雲間同作客。杏花吹笛喚眞眞。

款に云はく「楊鐵史」「洪綬」。

陳印洪綬、章侯氏の二印を鈐せり。明季の遺老にして、其の書、其の畫、俱に飄逸神化の域に入れるものを擧ぐれば、八大山人、石濤、陳洪綬等即ち是なり。但石濤の書は、題跋の外、絶えて卷軸の大字を見ず。八大山人の書は、世往往有れども吾齋纔に其の一軸を藏するに過ぎず。惟洪綬に至りては、余年來之に遭ふ毎に、必ず力購し、獲る所既に三軸に達せり。皆草書にして、流麗に兼ぬるに古樸を以てす。自らは吾齋頭の誇なり。

陳洪綬倣宋人梅竹丹禽圖立軸

高五尺六分

闊一尺七寸二分

絹本

著色畫。太湖石傍に老梅一株と小竹數竿を寫し、小禽二羽を配せり。梅花は白、雪を欺き、蒼苔老幹を封じて青蛇を見るが如く、小禽は紅、珊瑚の如く、竹葉は鉤勒して、墨渲を施さず。描法の奇古なること、尋常作家の夢想だにする所にあらず。即ち宋人より脱胎して、行るに獨特の筆を以てせり。款に云はく「老蓮洪綬畫於谿橋」。

陳洪綬高士雅筵圖卷

高七寸四分

長四尺二寸二分

絹本

墨畫。人物凡て六。文房諸具より瓶花、酒甌に至るまで該備せり。款に云はく、「老蓮洪綬畫於吳山道觀」。章侯の一印を鈐せり。卷中に周櫟園亮工の小楷書長題あり。之を讀むに、此の卷は洪綬が櫟園の爲に畫ける所にして、時は順治八年辛卯なり。洪綬は順治九年壬辰五十四歳を以て歿せり。即ち此の卷は歿前一年の作に係る。是より先櫟園屢々畫を洪綬に索むれども應ぜず。辛卯の年、湖上に相逢ふ。此の時、洪綬欣然として「これ予が君の爲に畫を作る時

なり。云ひて、急に縑素を命じ十有一日を費して、大小四十二幀を作れり。此の卷即ち其の一なり。櫟園の題識に「其急急爲予落筆之意、客疑之、予亦疑之。豈意予入閩後、君遂作古人哉」の一節あり。即ち餘命幾何も無きを感じて、急に數十幅を畫き、友人が積年の請囑を満たししなり。櫟園後に此の卷を其の友林鐵崖に贈るに臨み、加ふるに一題一跋を以てせり。之を讀むに、當時の事歴を敘して、感慨殊に深し。文は賴古堂集にも之を載録せり。但此の卷と字句の同じからざるものあり。今此の卷に依りて全文を録し、以て刻本の誤を正す。卷中の字剝損して讀む能はざるものは、刻本に依りて之を補へり。

題文

章侯與予交二十年。十五年前、只在都門。爲予作歸去圖一幅。再索之。舌敝穎禿。弗應也。庚寅、北上、與此老晤于湖上。其堅不落筆如昔。明年、予復入閩。再晤于定香橋。君欣然曰。此予爲子作畫時矣。急命絹素。或拈黃菜葉。佐邵興深黑釀。或令蕭數青倚檻歌。然不數聲輒令止。或以一手爬頭垢。或以雙指搔腳爪。或瞪目不語。或手持不聿。口戲頑童。率無半刻定靜。自定香橋移予寓。自予寓移湖干。移道觀。移舫。移昭慶。始祖予津亭。猶携筆墨。凡十又一日。計爲予作大小橫直幅四十有二。其急急爲予落筆之意。客疑之。予亦疑之。豈意予入閩後。君遂作

古人哉。予感君之意。卽所得夥。未敢目一幅貽人。乙未、難作。諸強有力劫以勢。予弗爲。連卽有作據舩狡獪者。予亦以石家行酒美人視之。丙申春、予復入閩。以此卷自隨。念予負臯大讞者。必欲殺予。媚人湯燭逼人。七尺軀尙非我有。況此卷哉。又念付託非人。負我良友。因以寄鐵崖子。予友自章侯外。惟一鐵崖。而鐵崖獨未交章侯。章侯交予。而未交鐵崖。是一缺陷。請以此幅爲兩君驛騎。章侯可以無憾于地下。予亦可免輕棄亡友筆墨之辜矣。

丙申孟夏、大梁周亮工記

跋文

丙申、以此卷寄鐵公。時公方備瓊海兵。戊戌、予復自閩赴廷尉質、抵西曹。不十日、而公亦中讒逮至。頰繫之地、相去數武。唾咳皆聞。獨不能交語耳。當時意吾兩人、且夕且死。卽徼天幸。貽卷者藏者。漏其一得不死。然已不能並活。此卷歸他人勿論矣。使貽者不得脫。藏者獨存。何以把此耶。庚子、公旣蒙

恩南還。辛丑、予寃旣雪。亦得甦生。是年秋、值公明聖湖。出此相視。裝潢有加。舊觀頓返。故人手跋。皆爲予抱痛。予把此卷。蓋不禁潸然淚數行下也。嗟夫鐵公、當時意我兩人、卽萬幸一脫耳。豈意貽者藏者不隻死。乃得並活。復從荷香桂影茗椀爐香閒從容展視如是耶。嗟夫鐵

公。東崖先生所謂日影之悲。山陽之痛。予兩人幸免矣。第章侯不免作人琴之感。予對此滋戚。今日章侯第四兒鹿頭。涉江過慰。一衣帶水。便是老遲埋骨處。鐵公固因此卷以交章侯者。未免有情。亦復誰能遣此。

辛丑閏月廿六日、大梁周亮工題于聖湖岸側之連山草堂。

盧象昇書幹桃風雨詩立軸

高六尺三寸六分

闊一尺七寸二分

綾本

行草書。三行。七言絕句一首。

幹桃風雨三千尺。根老若泉八百年。不用江頭喚元緒。何妨湖上識神仙。

款識に云はく「弟盧象昇書爲沙翁陳老年臺」云。象昇、盧氏建斗の二印を鈐せり。九丹鑑藏の印あり。即ち朱九丹の舊物なり。

盧忠肅公の事蹟は、史上に炳乎たり。茲に之を言ふを須ゐず。唯其の建策用ゐられず、事復爲すべからざるを知りて、部下を集め、四面環拜して「吾は將士と同じく國恩を受く、死せざるを患ふとも、生きざるを患へず」と言ひて、遂に五千の寡兵を提げて、十萬の清軍に當り、奮

戦すること二日、矢盡き刀折れて尙屈せず。單身敵陣に入り、矢を蒙りて蝟の如く、刃を受くること三劔に及びて乃ち死せり。其の壯烈、吾が楠河州に髣髴たるものあり。而して其の死せし時、齡僅に三十九歳なりき。史を讀む者をして、紅涙の滂沱たるを禁ぜざらしむ。此の軸は何れの年に成りしかを知らず。而も書法高逸、老成人の手法に似たり。公は翰墨の道に於いても、亦早く渾熟の境地に達せしを知るべし。

盧象昇書七言絕句立軸

高五尺四寸九分

闊一尺五寸八分

綾本

行草書。其の詩に曰はく、

萬騎千官擁帝車。八龍三馬訪僊家。鳳皇原上窺青壁。鸚武盃中弄紫霞。

款に「盧象昇」署し、盧印象昇、建斗氏の二印を鈐せり。

張廷濟は忠肅公の臨右軍草書帖に跋して「即ち書を以て論ずるも、已に響を山陰に嗣ぐに足る」と云へり。今此の軸を見るに、圓勁渾古、果して右軍を追蹤せるを知る。過雲樓書畫記に公の十驥詠卷を載せたり。即ち公の三十九歳の作なり。此の外には未だ著録に載せたるを見

ず。其の墨蹟の多からざるこ亦以て知るべきなり。

盧象昇水墨山水立軸

高六尺四寸二分 闊二尺四寸三分 綾本

奇古雄偉、驚心駭目の巨作。圖局用筆、俱に水墨山水の蹊徑を掃盡して、別に新境を闢開せるものこ評するも不可なし。幅の上中段に互りて山を畫く。山容奇峭、宛然笏を竝列せるが如く、淡墨長皴を施すの外に遠樹なく、點苔なく、兀兀として攢立す。奇絶怪絶。下段の土坡樹木は稍々雲林の意ありて、枯淡蕭條の致あり。酒瓶を提げて橋を過る人物を描く、尤も古拙を極む。上に一詩を題して曰ふ。

淳樸舊山川。空濛下釣船。何人沽酒去。貪立斷橋邊。

秋入夔門、訪華麓司空、不值、待歸夜飲、興闌索畫、即景圖之、象昇

款下に盧、象昇の方印、右方上に丹心一片の長方印を鈴し、幅の下角に胡氏拜觀、胡世勳家□子子孫孫永寶の藏印あり。款署の上邊と幅の上左角に縑素補修の痕あるも幸に雅觀を妨げず。

象昇の畫は坊間之を傳へず、著録之を載せず。此の幅に於いて始めて之を見るは頗る異とすべきが如し。然れども倪元璐、黃道周、張瑞圖、楊文驄等の諸公は傳記之を曰はざるも皆畫を善くせり。明末名家の流風因りて以て知るべきなり。乃ち盧象昇の畫あるも亦疑を挾むべきにあらず、況んや其の畫は作家の習氣を超脱して排冪縱橫、眼中人無きが如く、高人隱士が胸中の磊塊を洩して始めて斯くの如き筆墨あるを得べし。斷じて有心故造の能く及ぶ所にあらず。特に題詩の字を見るに大幅と異なる所なく、明末の筆氣直に人に迫るものあり、書畫俱に精妙。洵に獲易からざる墨寶なり。倪元璐、黃道周等諸家の畫は尙獲べきも盧象昇の畫は此の幅を外にしては今日之を見ること至難なるべし。象昇年を亨くること僅に四十歳に満たず。其の作る所多からず、世に傳ふる所の寡きは固より言を俟たず。

金俊明歸莊陸鴻合筆歲寒三友立軸

高三尺五寸一分 闊一尺五分 紙本

墨畫。金俊明梅花を寫し、歸恒軒莊は竹を補ひ、陸雪舟鴻は松を畫けり。皆款印あり。俊明の款識に云はく「辛亥春日、爲僊範道兄寫楸。耿庵金俊明」云。款し俊明之印、不寐道人の二印

を鈴せり。辛亥は康熙十年なり。俊明は明の萬曆三十年壬寅に生まれ清の康熙十四年乙卯に
齡七十四を以て歿せり。乃ち此の畫は其の七十歳の作なり。

明季畫梅の高手は、人皆金俊明を推さざるはなし。桐陰論畫に云はく、明季の畫梅諸家は、均
しく王元章を師法とし、概ね通變無し。孝章は獨り花光補之の間を斟酌して別に雅構を成し、
疎花細蕊、丰致翩翩たり。眞に是詩人の胸次にして秀韻天成なり」と。俊明の眞蹟を見たる者
は、蓋し此の評を肯定するに吝ならざるべし。

歸恒軒の畫竹は神品の稱あり。その天下に重ぜらるゝこと、俊明の畫梅に殊ならず。陸雪舟
の寫生もまた當時聲譽を擅にせり。三家の筆墨、今此の一軸に萃まる。尤も珍すべし。

傅山准千留別詩立軸

高七尺四寸

闊一尺四寸三分

絹本

草書。七言絕句一首。

楚州春色可准千。儘許郎君醉眼看。休作周郎頻一顧。驚鶯深坐柳煙寒。

款識に云はく「准千留別素兄韻史。方外山」と。傅山印の一小印を鈴せり。自ら方外と署款せし

より之を推せば、此の軸は乃ち傅山晩年の作ならむ。字字生動し、筆端風生ず。蓋し傳書の上
乘なるものなり。

傅山自ら書を論じて云はく、「初め晉唐を學びて肖る能はず。趙松雪、董香光の流麗を喜びて
稍々之を臨すれば、則ち既に眞を亂る。幾も無く自ら愧ぢて之を棄て、遂に顔魯公を學べり」
と。即ち骨格を顔に取りて、別に一生面を開けるを知るべし。

傅山書治家格言屏十二軸

高七尺七寸三分

闊一尺五寸四分

紙本

草書十二幅。尺許の大草書を以て朱文公の治家格言を書せり。縦筆紛披、光怪陸離。沿沿數百
字、愈出で、愈妙なり。謂はゆる老手劉輪、運斤成風の勢あり。左に其の全文を録して讀むに
便ならしむ。

黎明即起、洒掃庭除、要内外整潔。既昏便息、關鎖門戶、必親自檢點。一粥一飯、當思來處不
易。半絲半縷、恒念物力維艱。宜未雨而綢繆。毋臨渴而掘井。自奉必須儉約。宴客切勿留
連。器具質而潔、瓦缶勝金玉。飲食約而精、園蔬愈珍饈。勿營華屋、勿謀良田。三姑六婆、實

淫盜之媒。婢美妾嬌、非閨房之福。奴僕勿用俊美、妻妾切忌艷裝。祖宗雖遠、祭祀不可不誠。子孫雖愚、經書不可不讀。居身務期質樸、教子要有義方。勿貪意外之財、勿飲過量之酒。與肩挑貿易、母估便宜。見貧苦親隣、須加溫恤。刻薄成家、理無久享。倫常乖舛、立見消亡。兄弟叔姪、須分多潤寡。長幼內外、宜法肅詞嚴。聽婦言乖骨肉、豈是丈夫。重貲財薄父母、不成人子。嫁女擇佳婿、母索重聘。娶婦求淑女、勿計厚奩。見富貴而生詔容者最可恥。見貧窮而作驕態者賤莫甚。居家戒爭訟、訟即終凶。處世戒多言、言多必失。母恃勢力而凌逼孤寡。勿貪口腹而恣殺牲物。乖僻自恃、悔誤必多。怠情自甘、家道難成。

第十二軸の末。款に云はく「山書」云。傳山印の二印を鈐せり。

傳山は王覺斯と共に明季掉尾の書聖たり。故に人動もすれば傳山を目して專門書家と爲せり。何ぞ知らん傳山は孫夏峯、黃黎州、顧亭林、陸桴亭等の碩學と駢鑣し、當時の鴻儒にして、河北の大師たりしこと數十年、其の名天下に震ひ、翰墨は畢竟其の餘技なるを。明亡びて後、世家舊族の身を以て醫を沽りて纔に糊口せり。清廷屢屢徴されたれども高臥して出でず、以て清節を全ふせしに至りては、其の出處進退、王覺斯、張端圖輩をして慙死せしむるに足る。此の幅は尋常應酬の類にあらず、特に尙ぶべしと爲す。

傅山書遊仙詩屏十二軸

高七尺四寸三分

闊一尺六寸二分

絹本

一説に治家格言は清初の朱用純の著す所にして、朱文公の作にあらずと云ふ。用純字は致一、父集璜は明末の難に殉せり。用純乃ち王褒攀柏の義を慕ひ、自ら號して柏廬と曰ひ、其の學は程朱を確守せり。康熙中、鴻博に薦められしかども固辭して受けざりき。著に愧訥集、大學中庸講義等あり。

草書、行書、草篆書等を以て每軸七言絶句一首を書せり。凡て十二首。霜紅龕集を按ずるに、第一軸より第十軸に至る十首は「遊仙詩」にして、第十一軸、第十二軸は「贈陳十二首」中の二首なり。辭句は遺集に載する所と往往同じからざるものあれど、今之を説かず。書法縦恣にして、通讀に便ならざるが故、全詩を左に録す。

第一軸 草書

靈芝不服服桃花。海策籌添金鼎沙。龍汁食來生羽翼。還從暑路集煙霞。

第二軸 草書

玉齒嗎然好好陶。西來金母獻蟠桃。咸池樂奏雲璈疊。高集崑崙海鶴毛。

第三軸 草行書

醉挾青煙一道飛。神仙騎得白鸞歸。寶珠如卵纔吞罷。便入天門侍紫微。

第四軸 篆草書

太華峰頭玉女盆。仙人杖策向天捫。好風好雨齊天地。休理塵寰腐算論。

第五軸 行書

珠庭上藥重玄根。九轉深深抱命門。異草有霜無假練。海東飛采獻三元。

第六軸 草書

洞中俄頃八千春。萬樹桃花且避秦。聞道秦人且道好。又移靈館避漁人。

第七軸 草書

明珠如日寶冠嵌。雲笈頗抽展玉函。太上垂芒人不解。只除彭祖共巫咸。

第八軸 草書

碧雲深處擁瓊环。半醉酣生銀海瀾。醒酒不須塵世鮓。滿盛玉豉水晶盤。

第九軸 草書

黑白形分混洞開。青黃二氣妙延胎。絳河僻處泥丸護。仙客陽平樹久栽。

第十軸 篆書

九宮行氣自推移。至潤成丹妙適宜。一粒大還資寶籙。世人道美不教知。

第十一軸 篆書

天漢乘流入馬涯。瑾瑜玉液折杉花。長生秘術誰能得。一盞青霞浸五加。

第十二軸 草篆書

山長宮牆見百官。巖廊皋擁不知寒。閭浮金界桃蹊好。苜蓿承顏未覺酸。

第十二軸の末に草書の款識あり、云はく
吾友鄭四舜卿李五都梁、致款於山長。更累爲斑斕之助。須此醜鴉介之、口占手信。眞不知詩
爲何法、字爲何體。老耄率爾、回看自笑而已。傅山。

と、傅山印、觀仙翁の二印を鈐せり。

傅山は金石遺文に長じ、造詣頗る深かりき。清朝の莊葆琛、吳荷屋、畢秋颿、阮文達の諸家、金石文字を以て經史を考證してより、金石の學蔚然として起れり。而も其の源流に溯れば、傅山實に法門の宗祖たり。此の軸に見る所の篆書は以て其の一端を窺ふに足る。草行書は往往

放肆に流るゝ所あれども、其の拘拘たらざる所、却つて逸韻の流露せるを見る。

傅山書杜工部詩立軸

高五尺九寸四分

闊一尺五寸一分

紙本

草篆書。五言律詩一首。

奇兵不在衆。萬馬救中原。譚笑無河北。心肝奉至尊。

孤雲隨殺氣。飛鳥避轅門。竟日留歡讌。城池未覺喧。

款に云はく、「傅山艸」と。傅山之印の一印を鈴せり。邊幅に黃宸熙、宮爾鐸、吳大澂、呂申の題跋あり。秦福亭の聞見瓣香錄に云はく「艸篆は太原の傅澂君山、翹めて之を爲れり。古今未だ聞かざるなり。其の體は全く篆法を用ゐ、其の筆は全く艸法を用ゐたり。字として散ならざる無く、筆として活ならざる無し。散中法あり、活中力あり。濃筆澹筆渴筆あり、龍蛇の捉摸すべからざるが如し」と。此の軸正に其の言の如し。

傅山雜書冊

每頁 高七寸七分

闊四寸六分

紙本

計十二頁

每頁烏絲闌五行。隸楷行草各體を以て古文詩を書せり。署款無し。末頁に傅山之印の一印を鈴せり。

傅山の書名は今之を説くの要無し。但平常見る所の條幅の類には草書多く、而して人亦傅山の草書に工なるを知りて、其の隸楷各體、適くして可ならざる無きを知らず。此の冊は蓋し意滿ち興到れる時の作なるべし。僅僅十數紙といへども傅山が八法の全豹を窺ふに足る。

李因蘆雁圖立軸

高五尺二分

闊一尺六寸六分

綾本

墨畫。款識に云はく「壬寅秋日、海昌女史李因畫」と。李因之印、今生氏の二印を鈴せり。

李因は崇禎十六年癸未、その夫、葛光祿無奇と共に京師より海昌に歸れり。後幾も無くして光祿歿しぬ。黃黎洲の李因傳の一節に曰はく、

光祿捐館、家道喪失。而是庵煢然一身、酸心折骨。其發之爲詩、尙有三世相韓之痛。三十年以來、求是庵之畫者愈衆。遂爲海昌土宜饋遺中、所不可缺之物。

此の畫款の壬寅は康熙元年なり。即ち光祿の歿後にして、天下争ふて是庵の畫を索むる時なりき。當時同邑に是庵の偽作を爲すもの四十餘人の多きに及び云ふ。故に今日見る所のものに贗鼎少からず。鑑者深く戒めて薰蕕を辨ぜざるべからず。

文從簡嵩齡圖立軸

高二尺三寸六分

闊一尺三分

紙本

淡墨畫。老松靈芝を寫し。隸書款に云はく「嵩齡圖、文從簡戲墨」。從簡之印の一印を鈐せり。從簡は能書を以て知られ、其の畫名は甚だ高からず。而も曾祖父衡山の傳統を承け、雲林叔明を兼ねて別趣饒く、亦尋常作家の比にあらず。

葉煥彬の觀畫百詠に從簡を詠じて云はく、「長洲畫派祖衡山。一姓無人與抗顏。我愛枕煙工擬古。掃除穠縵入蕭閒。」。枕煙は從簡の別號なり。蓋し文氏一門は家風を世守して變らざりに、從簡に至りて惟り倪王を學び、稍稍祖翁の手法を變じ、簡疎蕭散を追へり。これ此の句ある所以なり。

呂留良自書詩帖冊

高八寸六分

闊三寸二分

金箋本

計九頁

草行書。七言律詩一首。

秋入園林氣象新。喜從南極接星辰。籬邊佳趣歸元亮。谷口幽棲識子真。

書就鶴來看萬舞。釀成客醉動千旬。琅玕寫出先生意。勁節虛心歲歲春。

款識に云はく「奉祝願老親翁六十初度。眷弟呂留良拜草」。光論印、用晦の二印を鈐せり。

留良が、文字の禍に遭ひ、著書を燬棄せられてより、其の墨蹟は頓に價を十倍せり云ふ。余二十年來、目睹する所、惟此の一帖のみ。以て今日流傳の少きを知る。

冒襄贈夾山和尚詩立軸

高三尺九寸八分

闊一尺九寸四分

紙本

草行書。七言律詩一首。

荒城春吼海潮音。散聖安禪出竹林。龍象精神雄翺偉。光華氣色草堂臨。

極知味法擔當厚。畢竟吾儒得力深。欲識廬山真面目。老人籬畔有陶吟。
款識に「和孺子韻贈夾山和尚二首之一。巢民冒襄、壬申端午年開九秩、目告初回、強書」云。右方
上に水繪閣の圓印を鈐せり。

冒襄の書は晩年に至りて倍々優蹇の致を極めたり、此の軸は康熙三十一年、即ち冒襄の歿せ
る一年前の書なり。下に巢民襄辟疆、祖孫父子三休林下、如南山之壽の三印を鈐せり。

冒襄書方吳五十雙壽序屏

高九尺五寸四分

闊一尺六寸

綾本

計六軸

行書。

巢民の同郷に名醫、方先生といふ者あり。康熙九年臘月、先生其の配の吳孺人と共に五十の
雙壽を祝せんと欲し、巢民に壽序を撰し、并せて之を書せんことを請へり。巢民一たび之を
辭したりしが、時に歳大に歎し、巢民己の貧を忘れて、賑恤の事に力む。乃ち此の軸を書し、
其の潤筆錢を以て米十石を買ひ、粥を作りて窮民を恤せり。事は述べて序の末段に詳なり。

余承兩君之命、愧以不文辭。時不量力、復力賑事。爲流離萬衆請命、號呼于冰雪窖中。皆厭

憎以爲多事、無肯應者。以兩君潤筆幣爵之惠、易米十石、爲粥于路、以飽萬人半日之腹。是即
方子活人之驗也。遂欣然揮毫、即述兩君之言、以爲之序。

康熙九年臘朔之吉、水繪庵六十有一老人冒襄撰併書。

下に巢民襄辟疆、小三吾の二印を鈐せり。

明の遺民中、文采風流を以て論ずれば、先づ指を巢民に屈せざるべからず。但其の書畫の流
傳せるは極めて罕なり。此の序は六大軸に亘り、行筆流麗、逸致字外に溢る。尤も獲易からざ
る妙蹟なり。

冒襄松喬芝秀圖立軸

高四尺八寸一分

闊一尺六寸二分

綾本

水墨。一株の老松を畫き、其の下に秀石萱草を配せり。款識に云はく「松喬芝秀、命畫奉祝遠
翁老叔大人五十初度、乙卯臘月立春前二日、姪襄」云。下に雉皋古巢民冒襄辟疆氏圖書印記の
一印、前に小三吾の一印を鈐し、下右角に書中有女畫中有詩、雉皋冒氏水繪庵蘭雙畫史の二
印を鈐せり。乙卯は康熙十四年にして冒襄六十六歳の作なり。

冒襄枯木怪石圖立軸

高二尺二寸一分 闊一尺一寸八分 紙本

淡墨を以て奇石を寫し、渴筆を以て枯木を畫き、款を署せず、巢民冒襄印、辟疆の二印を鈐せり。上方に童廷理の題あり。藏印凡て五。中に宮氏農山思無邪齋圖書の二印あり。即ち宮爾鐸の印記なり。

巢民の書畫は流傳多からず。就中畫は最も稀なり。これ小軸なり。雖も以て嘉珍とすべし。

女史蔡含花卉立軸

高二尺四寸 闊一尺五寸 絹本

著色畫、細筆を以て花卉數種を寫せり、款識に云はく「甲辰秋七月、倣宋人徐崇嗣意、女蘿子蔡含製於水繪園」と、蔡含之印の二印を鈐せり、甲辰は康熙三年なり。

女史は冒巢民の姬人にして、金玥と相並びて其の名文苑に嘖嘖たり、畫は未だ必ずしも高手と云ふを得ず、而れども流傳の多からざるを以て珍とすべし。

女史金玥果花卷

高九寸一分 長四尺七寸四分 紙本

清初の風流名家冒巢民に二姬あり。一を女蘿蔡含と云ひ、一を曉珠金玥と云ふ。俱に詩畫を能くし、文苑、今尙其の名を知らざるもの無し。此の卷は工筆著色を以て、果花昆蟲を畫き、「染香閣女史金玥寫」と署款し、金玥の二印を鈐せり、卷前に辟疆の二印あり、即ち巢民の印記なり。

女史金玥倣白陽花卉卷

冒襄跋

高一尺三寸 長十尺二寸三分 絹本

著色畫。雜花十餘種。款無し。卷末に水繪閣の二印を鈐せり。筆致工細にして而も俗韻無く、傳彩豔麗にして清雅を失はず。蓋し孫雪居陳白陽の亞流なり。近時花卉の能手は其の人に乏しからず、而も其の畫く所は技工餘りありて生氣足らず。遠く之を望めば宛も彫塑の如し。形象は摹し易く神采は捉へ難し。花鳥を畫きて雅俗の分る、所は此に在り。曉珠の此の卷の

如きは、閨閣の墨戲なり。こして蔑視すべきにあらざるなり。
 後別幅に冒巢民の草書一跋あり、巢民の草書は、意態傅山に近くして風味之に過ぎたり。常に見る所は行書多くして草書罕なり。これ尤も珍すべし。全文左の如し
 花卉之妙、至宋始盛、黃筌父子及徐熙輩、則銀鈎鐵畫、濃艷不凡、此皆以工整爲法、元季則錢玉潭、滕處士、夏侯元祐、亦能効法前人、至陳白陽、純以性成、故其筆多宕蕩、自然得天眞之趣、金姬作此卷、似稍近白陽、又能於奇險處、畧加工整、不泯古法、亦閨閣中所難得、得母前身亦畫師耶。
 巢民老人冒襄記。
 後に祖孫父子三休林下、巢民襄辟疆の二印を鈐せり、藏印一あり。
 巢民の姫人この韻事は、古來文人豔羨の資たらざる無し、今此の卷を觀て轉た水繪園中當年の風流を追想せずんばあらざるなり。

項聖謨雙松圖立軸

高四尺二寸八分 闊一尺九寸四分 紙本

墨にて「天挺虬枝」の四字を署し、後に款識して云はく

余于甲午臘八日、訪道靈隱、見窓前古松森鬱、有感漫筆、因拈小偈曰、冰雪爲供、竹石爲友、如如不動雪山老叟。古胥山樵項聖謨并識。
 詩酒緣、項印聖謨、漸近自然の三印を鈐せり、右方下に清遠閒放の一印あり、甲午は萬曆二十二年にして、聖謨五十八歳なり。

項聖謨青山秋雲圖立軸

高四尺一寸六分 闊一尺一寸六分 紙本

水墨山水なり。款題に云はく、
 一簇青山水幾灣。秋雲捲雨出層巒。偶來偃息林亭下。遠見巖陰瀑影寒。
 「項聖謨」署款し醉風人詩畫、別號易庵の二印を鈐せり。周氏夢水山房の舊藏に係る、下角に其の藏印あり。

聖謨は書畫を善くし、松竹木石花草皆佳ならざるはなく、初め文徵明を學び、後、宋元に溯る。山水は殊に元人の氣韻を帶ぶ。此の軸筆意雅秀にして頗る韻致あり、その淵源する所淺からざるを知る。

項聖謨秋林禪悅圖立軸

高三尺三寸三分

闊一尺四寸九分

紙本

設色の秋景山水なり。右方上に「秋林禪悅」の四字を署し、「古胥山樵項聖謨」を署款し、神遊林壑、易庵居士の二印を鈐せり、右方下に項孔彰留眞迹與人間垂千古の一印あり。此の軸は布局幽靜、設色清豔。加ふるに紙色の潔淨なるを以てす。聖謨作品中の睹易からざる佳蹟なり。聖謨は項子京元汴の孫にして董其昌と同時なり。其昌嘗て曰はく「項子京此の文孫あり。好古賞鑑、百年食報の勝事に愧ぢず」と、聖謨の筆墨の今世に流傳せるを見るに、玄宰の言は必ずしも諛言ならざるを知る。

查士標澗樹寒鴉圖立軸

高三尺

闊一尺五寸四分

紙本

墨畫。款題に云はく
古木饒寒色。栖鴉點點生。無人乘野興。天外夕陽橫。

款に「梅壑老人士標」云ひ、下に士標私印、查二瞻の二印を鈐せり、左方上に隸書にて「澗樹寒鴉」の四字を署し、田林之印、志山の二印を鈐せり、收藏印は畢沅鑒藏の外に十方あり。二瞻は初め倪雲林を學ひ、のち參するに梅道人を以てす、用筆多からず、墨を惜むここ金の如し、此の軸は尤も其の本色を顯はせるものにして風神瀾散、思致荒寒を極む。

查士標春景山水立軸

高四尺五寸三分

闊二尺五分

紙本

墨畫。題して云はく
重重烟樹鎖松堤。野客來尋路不迷。行過小橋塵土隔。落花無數鳥爭啼。
戊午長夏、查士標「」款し、士標私印、查二瞻の二印を鈐せり。左方下に藏印一方あり。戊午は康熙十七年にして、士標六十四歳なり。

此の軸は空靈を以て勝り、所謂筆少くして韻多きものなり。前人二瞻の畫を評して「山は點苔せず、樹は葉を加へず、羅羅清疎、簡以て韻を取り、淡以て神を取る、清閨に脱胎して蹊徑絶た高し」と云へり、洵に篤論なり。

查士標書七言絕句詩軸

高五尺六寸

闊一尺六寸

綾本

行書二行。詩に曰はく

世間稷事風流處。鏡裏雲山若畫屏。今日會稽王內史。好將賓客醉蘭亭。
「書似伊老年兄正、梅壑查士標」款し、下に查印土標、二瞻氏の二印、右方上に梅壑の二印を
鈴せり。

二瞻は書を以て重きを天下に爲せども、書も亦當時既に名ありき、その宗をせしは米芾に在
り、而も亦極めて董其昌に似たり、世人因りて米董の再來と稱せりと云ふ。

查士標臨楊少師書立軸

高六尺一寸八分

闊一尺五寸八分

花綾本

楊凝式の大仙帖を節臨せり。曰はく「二瞻の二印、右方上に梅壑の二印、右方下に
羽衛一何鮮。香雲起暮煙。方朝太素帝。更向玉清天。鳳曲凝猶吹。龍驂儼欲前。」

眞文幾時降。知在永和年。

楊少師大仙帖、臨似潤之年翁壽、查士標

下に查印土標、二瞻の大方印、右方上に梅壑の二印を鈴せり。

查士標臨米書立軸

高七尺二寸五分

闊一尺六寸六分

綾本

米芾の天馬賦の一節を臨書すること四行。款識に云はく「臨天馬賦、辛酉登高日、弟查士標爲
子潤道翁先生并正」と、下に查印土標、二瞻氏の二印、右方上に梅壑の二印を鈴せり。土標が
米書に浸淫せしことの深きは、此の軸に由りて見るを得べし。時款の辛酉は康熙二十年にし
て、土標の六十七歳に當れり。

查士標書唐詩立軸

高六尺二寸五分

闊一尺六寸二分

綾本

草書。五言律詩一首。曰はく

俗遠風塵隔。春還初服遲。林擬中散地。人似上皇時。芳杜湘君曲。幽蘭楚客辭。山中有春草。長以寄相思。

款識に云はく「書唐人詩、似爾儀年道兄。查士標、下に查印士標、二瞻の印を鈐せり。

士標の草書は柔所、柳條の嫋嫋たるが如く、勁所、枯木の槎枒たるに似たり。最も雅趣津津たるを覺ゆ。世人士標を見るに畫人を以てし、其の書の更に貴ぶべきを知らず。特に憾むべし。吾齋力めて士標の書を收むる所以は、聊か茲に見る所あればなり。

歸莊墨竹詩畫冊

高八寸二分 闊一尺一寸七分 紙本 計十四葉

歸莊は崇禎甲申の變後、復出仕せず、山水の間に放浪して身を終へき。其の襟懷既に高曠なり。故に書畫また奇逸の致饒し。特に其の墨竹は神品を以て目せらる。此の冊は竹を畫けるもの七幅。詩を録せるもの七幅。詩は行草書、七言絶句凡べて五首。畫には毎頁元功の二印を鈐し、書には毎幅歸莊之印、元功の二印を鈐し、末幅に「戊申臘月、寫墨竹數叢、并書題畫絶句五首、皆近日作也。恒軒歸莊」款識し、歸莊之印、元功の二印を鈐せり。戊申は康熙七年なり。

今その詩二首を摘録す。

何處寒姿嘆碧天。臨流弄影有餘妍。皇英遺跡多傷感。不畫湘江畫渭川。

貞姿勁節歲寒叢。貌似還須取意工。吳下畫師無解事。惣如柳葉在風中。

古甲上人雪山蕭寺圖立軸

方黃石題

高五尺四寸七分 闊一尺八寸三分 絹本

著色畫。雪景山水、氣味重厚にして、宋元畫を見るが如し。上方に方若眞の題あり、草書、十四行。「甲寅七月書、黃山老衲法若眞識」識し二印を鈐せり。

此の畫は款なし。方黃石の題識に依りて古甲上人の筆なるを知る。方款の甲寅は康熙十三年なり。畫は其の以前の作たること論なし。古甲上人の畫は世上流傳、極めて罕なり。書畫鑑影にその山雨奔泉圖を載する外、更に著録に見る所なし。黃石の題字と共に頗る珍すべし。

石谿茆庵老僧晤對圖橫軸

高一尺六寸七分 闊一尺九寸三分 紙本

墨畫。款題に云はく

弗庵不蔽日。內有老僧閒。積葉封荒逕。裁雲潤野顏。鐘聲寒不斷。石火餒常刪。
相對畫無事。柴門靜莫關。

庚子冬十二月念二日、作于供雲關中 石谿殘道人

下に介丘、石谿、白禿の三印を鈐せり。庚子は順治十七年なり。

此の軸は濃墨を用ゐて縱横揮灑し、蒼蒼莽莽として韻致毫端に溢る。小幀なり。雖も石谿の佳蹟たるを失はず。

石谿懸崖孤亭圖立軸

高四尺一寸八分 闊一尺一寸九分 紙本

淡著色畫。巖巒重疊の間、山樓隱見、崖下喬樹の陰に一亭あり。二人對坐して内に在り、一僕琴を携へて外より到る。款題に云はく、

酣縱從誇黃鶴樵。倪迂踈野一峰高。春江秀木孤亭迥。還向瀉波倩彩毫。 石禿殘道者

下に石谿の一印を鈐せり。

論者云はく「石谿の畫は書家の草法の如し、筆筆空靈、筆筆沈實なり。恣肆を極む。雖も規矩の中に在らざるは無し」と。又云はく「筆墨は蒼莽高古、境界は天矯奇闢。處處人を引いて勝に入るの妙あり」と。天矯奇闢は石谿畫境の長所なり。此の人にあらざれば竟に此の境を作る能はざるなり。

漸江溪亭孤松圖小軸

高二尺一寸五分 闊九寸九分 紙本

溪流老松を畫き、下に孤亭を寫せり。「石廷老居士屬畫、道弟弘仁」と款識し漸江僧の一印を鈐せり、藏印一あり。

漸江の畫は焦墨疎筆。清楚を以て勝を取れるもの多し。此の軸は濃淡相兼ね、疎細交々用ゐ、平生見る所に比すれば稍重厚の氣多し。是また漸江一種の手法なり。

漸江も雲林を師法せり。乃ち其の人も亦雲林の清逸に似たりしが如し。湯燕生嘗て漸江の畫に跋して黃山の遊を叙すること詳なり。事は此の軸と交渉無きも漸江の畫況の由來する所を知るに足れば之を左に節録す。

黃山の文殊院は高く萬峯の首に出づ、矮屋兩間、孤峭天に接す。寶月師此に居る。漸公遊んで之を樂み且贈るに詩を以てし「閉門千丈雪、寄命一枝燈」の句あり。寶師語りて曰はく漸公登峯の夜、偶々秋月圓明、山山數ふべし。漸公文殊石上に坐し、笛を吹く、發音嘹唳。上、雲表に徹す。俯して下界を視れば千萬の山みな側耳跣足して聽くものゝ如し。山中悄絶、惟蓮華頂の老猿數聲の奇嘯を作すのみ。三更に至り、衣單にして風霧禦ぐべからず。乃ち院に就いて宿せり。其の際を回思するに人世の遊にあらざりき。

漸江雪岩寒溜圖立軸

高二尺五寸五分 闊一尺三寸 紙本

墨畫。寒岩の下、溪流小艇を畫き、處處配するに枯木老松、籐蘿蘆荻を以てせり。岩石は點苔を施さず、草木は細筆を用ゐ、簡素清逸を極む。蓋し漸江の眞面目なり。中央岩上の空處に「雪岩寒溜、漸江」を款し、漸江僧の小印を鈐せり、藏印三あり。漸江は雲林の蕭疎古淡を學べるが如くなるも、又別に雋偉秀勁の氣を具たり。夫の寥寥たる數筆、匆匆として塗抹し、氣魄に乏しきものは漸師の眞蹟にあらず、鑑者知らざるべからざるなり。

るなり。

釋道濟授易圖立軸

高四尺二寸八分 闊二尺一寸 紙本

虬松の下、蘆葦の間に一泊舟あり。舟中の人對坐して授受の狀を爲す。上方に隸書款識あり。云はく

授易圖、清湘石濤濟、寫於秦淮之向山艸堂、庚申夏五月、後に再び款識して云はく

此紙是予枝棲長干時、爲江漢友人所作、今種閑主人石亭翁、偶得之於廣陵市兒之手、即携至余大滌堂下、驚喜欲絶、因命補款、再正石翁也、時丁丑立冬前二日、清湘瞎尊者原濟我法、苦瓜和尚、清湘老人、阿長、瞎尊者の數印を鈐せり。右方下に搜盡奇峯打艸稿の一印あり。亦石濤の印記なり。藏印四。中に竹朋鑑定の一印あり、即ち李佐賢の鑑記なり。

款識の庚申は康熙十九年にして、丁丑は康熙三十六年なり。即ち十七年後に補録せるなり。王麓臺云はく「海内の丹青家、吾未だ盡くは識る能はされども、大江以南に在りては當に石

濤を推して第一と爲すべし。予も石谷も未だ逮はざる所あり」と云へり。蓋し石濤は縦筆離奇、端倪すべからざる所に於いて勝を取り、其の逸趣に富めること、清朝三百年間、推して第一人と爲すべし。此の軸の如きは其の尤も出色の筆墨たり。

釋道濟石鐘山圖立軸

高四尺三寸九分 闊一尺五寸四分 紙本

墨畫。樹木巖石、奇古絕倫。上に石鐘山記を書し「清湘石道人一枝下」と款し石濤の一印を鈴せり。又後に題贊一則を録し「清湘楚人石濤濟再識於池上、丙寅」と款識して粵山の一小印を鈴せり。丙寅は康熙二十五年なり。

此の軸の山水は殊に奇肆秀峭を以て勝り、所謂陶潛の詩、衫せず履せず。張旭の書、古無く今無しの如し。正に是れ石濤の眞面目なり。

石濤石谿は明の遺老にして身を桑門に寄せ、社稷覆没して一身尙存し、情を筆墨に遣れども心は前朝に在り。其の詩畫の豪放縱肆にして、奇崛悲愴の調あるは是が爲なり。鄭板橋は嘗て之を咏じて一詩あり。能く遺老の心事を道破せりと云ふべし。云はく

國破家亡髮總皤。一囊詩畫作頭陀。橫塗豎抹千千幅。墨點無多淚點多。

釋道濟孤峯高士圖立軸

高三尺九寸二分 闊一尺四寸一分 紙本

墨畫。孤峯の下、一高士杖を曳きて山逕を逍遙す。款識に云はく

樹色凝深谷。人語落孤峯。試携筇者。青山高幾重。清湘大滌子極

下に贊之十世孫阿長の一印及び右方下に藏之名山の一印を鈴せり。題詩の第三句「試」の下に「問」の一字を脱せるが如し。前人石濤の畫を評して云はく「色は愈蒼にして愈古。氣は愈逸にして愈神。胸に數千の積軸あり、眼に數萬の雲山あるにあらずんば、那ぞ能く之を辨ぜん」と。此の軸を見て此の評を想へば、轉だ琴心に觸るゝものあるを覺ゆ。

釋道濟黃山紫玉屏圖立軸

高一尺九寸八分 闊一尺四寸八分 紙本

墨畫。黃山の名勝、紫玉屏を寫せり。墨畫なれども遠山人物に微しく淡赭を用ゐたり。皴法點

苔、奇峭獨闢、人目を驚殺す。款題に云はく、石道人。惆悵當年紫玉屏。至今落日尙未醒。我時精選一千峯。萬仞飛流下深冥。

夏日風雨中、與客說黃山、忽憶紫玉屏、以淺色得之、清湘石道人濟

下に老濟の二印を鈐せり。又後に款識して云はく

槃宮道翁、偶過予一枝閣下、拈出舊時草稿、補款索咲。石道人

小乘客の二印を鈐せり。

釋道濟山水小軸

高二尺一寸

闊二尺二分

紙本

墨畫。斷崖の下、石坡の上、人あり獨坐長嘯す、款識に云はく

今時畫有賓有主、住目一觀、絕無滋味、余此紙、看去無主無賓、百味具足者、在無可無不可、

本不要好、而自好者、出乎法度之外、世人纔一拈筆、即欲求好、早落下乘矣、極至頭角俱全、

堪作底用、寒夜大醉、以此醒酒、未知可否

清湘老人濟下學元人款法

下に青山是我家の二印を鈐せり。

釋道濟溪山釣艇圖立軸

高五尺八寸五分

闊二尺二寸

紙本

奇峯秀嶺の下、喬松槎枒、溪畔に聳え峙つ。人あり艇を泛べ、綸を垂る。款識に云はく

或云坡公成戈字、多用病筆、又云腕著筆臥、故左秀而右枯、是畫家渴筆側筆說也、西施捧心

嘔病處、妍媚百出、但不願隣家效之。秋日審上永翁先生博咲、嗜尊者元濟

下に膏盲子濟、清湘石濤の二印を鈐せり。

此の軸の筆意墨氣、俱に黃山紫玉屏圖に彷彿たり。幽峭奇闢。古今に獨歩す。蓋し同時の作な

らんか。上海狄氏平等閣の舊藏にして、石印影本あり、世に行はる。

石濤嘗て自畫山水跋に畫法を論ぜり。其の言ふ所南宗の神秘を道破して餘蘊なし。今此の幅

に對して特に味ふべきを覺ゆ。左に抄録す。

吾昔時「我用我法」の四字を見て心甚だ之を喜べり。蓋し近世の畫家専ら古人を演襲し、論

者亦且某筆は肖たり、某筆は肖ずと曰へるを唾すべしと爲せり。今に及んで之を悟る、卻

つて又然らざるを。夫れ茫茫たる大蓋の中、只一法あり。此の一法を得れば則ち往くこして法にあらざる無し。而も必ず拘拘然之を名けて我法と爲す。吾は古人の法、是れ何の法なるかを知らず。而して我法又何の法なるかを知らんや。之を總ぶるに意動けば則ち情生じ、情生ずれば則ち力舉がり、力舉がれば則ち發して制度文章となる。其の實は本來一悟のみ。遂に能く變化して窮りなきも規模は一なるに過ぎず。吾今此の卷を寫し古法に合するを求めず。亦定めて我法を用ゐず。皆是れ意に動き、情に生じ、力舉がり、文章に發し、以て變化規模を成せり。則ち論者指して吾法と爲すも也可なり。指して古人の法と爲すも也亦不可無き也。

釋道濟臨江閣圖立軸

高三尺五寸九分

闊一尺八寸四分

紙本

淡著色畫。大江汪洋として流れ、斷崖の巔に一樓聳え。江を隔て、遠山黛の如く、布帆波上にノへたり。清楚閑逸、石濤の傑作なり。款題に云はく

江上流水清年年。江閣之上人眞仙。徵詩便至千百首。來客總帶雲與煙。

我今渡江一海鶴。笑謝浮萍起寥廓。他年再作江閣遊。涼月光光兩昭灼。

丙寅七月北上、憶臨江閣主人、石濤濟山僧寫

下に石濤山僧畫の一印、前に僧の一字印を鈐せり、即ち康熙二十五年の作なり。書も亦甚だ佳なり。石濤の行書は論者之を逸品の中に數へたり、此の軸紙色潔淨特に喜ぶべし。

釋道濟高士觀瀑圖立軸

高六尺八分

闊一尺六寸八分

紙本

淡著色山水。款識に云はく「畫爲長玉先生老道翁正、時壬子深秋、粵山石濤濟」と濟山僧、翰與空山枕石頭の二印を鈐せり。右方下に游戲三昧、斗山人の二印あり、亦石濤の印記なり。又星甫繼樞の一印あり。壬子は康熙十一年なり、即ち石濤が中年の傑作なり。

石濤の山水は墨瀋淋漓、宕落不羈。勢當るべからざるを常とす。此の軸は細筆を以て之を寫し、絶えて放肆の氣無し。而も布景奇古、手法秀拔。非凡の高手にあらずんば遂に此の境に至る能はざるなり。書家は謂はく未だ楷法に精ならずして草書を能くする者は有らじと。書畫の理、固に相同じ。此の纖細の筆を能くして然る後始めて縱横排募の神境に達すべきのみ。

釋道濟設色丹荔圖立軸

高四尺一分

闊一尺六寸七分

紙本

著色荔子。枝葉垂下、丹實纍纍たり。系ぐに七言律二首を以てせり。

客廣陵、平山道上見駕紀事二首

無路從容夜出關。黎明努力上平山。去此罕逢仁聖主。近前一步是天顏。

松風滴露馬行疾。花氣襲人鳥道攀。兩代蒙恩慈氏遠。人間天上悉知還。

甲子長干新接駕。即今己巳路當先。聖聰忽親呼名字。艸野重瞻萬歲前。

自愧羚羊無掛角。那能音吼說眞傳。神龍首尾光千焰。雪擁祥雲天際邊。

寸許の大行書、六行。左より右に涉りて幅の大半を占む。「清湘石濤濟山僧樹下艸」を款し樂休

釋印元濟、苦瓜和上、瞎尊者濟、清湘遺人、西域之人の六印を鈐せり。

石濤の花卉は畫品山水に遜らず。但人の之を知れるは尠く、其の作品亦罕なり、尤も珍とす

るに足る。詩中「即今己巳」の語あり、乃ち知る此の軸は康熙二十八年の作たるを。

石濤は畫を以て天下後世に鳴れり。而して書に於いても亦一旗幟を立つ。包慎伯は之を逸品

の中に數へたり。逸品とは慎伯の所謂「楚調自歌、不謬風雅」是なり、此の軸の書を見るに古樸
偃蹇、一種の逸韻、人を魅するものあり。

夢園書畫錄にも 石濤丹荔圖軸を載録せり。題詩此の軸と相同じ。但紙本の高闊、題款の位
置、並に鈐用の印章等は皆異なり。即ち別本なるを知る。

釋道濟山茶花圖立軸

高三尺一寸一分

闊一尺九寸六分

紙本

山茶花一枝。枝葉は水墨、花は丹彩。草書款題に云はく

花萼離披老更香。雪中偏肯出紅粧。可憐桃李東風日。總是紛紛兒女腸。靖江後人大滌子

痴絕、頭白依然不識字、阿長、大滌子極、東塗西抹、鄉年苦瓜、靖江後人の七印を鈐せり、又益

齋平生眞賞、磨兜堅室所藏書畫印、鄧實眞賞の藏印あり。鄧氏風雨樓の舊藏なり。

釋道濟著色花卉冊

高八寸八分

闊一尺二寸七分

紙本

計八頁

清湘老人の花卉は極めて逸韵高致。尋常畫師の藩籬だも窺ひ得る所にあらず。所謂天機を毫楮に洩し、造化を筆端に弄ぶものにして、白陽南田と雖も、往々及び易からざるあり。況や包山忘庵の徒をや。此の冊の如きは即ち其の一にして落筆妙靈。傳色明艷。眞に寫生の絶詣なり。

冊凡て八幅。每幅題するに沈石田の落花詩三十韻中の一を以てせり。書は分隸の意ありて亦頗る古趣に富む。末幅に款識して云はく

清明日、枕邊聞市頭泥屐聲、復展此冊、口誦白石翁落花三十韻、滌硯作書、無論花之品位、詩之先後、盡冊而止、極是快事、大滌子濟、

每幅題下に元濟、苦瓜、清湘老人、清湘石濤、前有龍眠濟、老濤等の印を一印或は二印を鈐せり。冊首に「清湘老人畫、怡憲閣藏、稽留山民金農題記」の舊籤を存す。

惲向山水立軸

高四尺四寸四分

闊一尺七寸五分

紙本

墨畫。溪山の圖なり。行書款題に云はく

小詩奉寄國華盟兄求正

冷雪寒雲一望窮。江南冀北氣全通。三年一試曾何益。良友天涯聚此中。

其奈棘人艱□□。欲聞佳況苦目風。前廷瘦鶴形如許。近日清詩幾度工。

交深爾汝氣初同。南北烽烟迥自通。種藥品花名士譜。讀書彈琴古人功。

春來雁影何零落。懶絕魚書亦杳逢。不是此心堅秉燭。可堪愁寂送歸鴻。

壬午二月、家仲升北遊、將謁國華、因寄此畫兼此詩、可想見我近狀、并博懷人一和無辭也。 盟弟惲向

下に惲本初、道生の二小印を鈐し、下角に吳惟英國華書畫印の一印あり。外に又藏印二一あれども模糊として辨ずべからず。時款の壬午は崇禎十五年なり。

桐陰論畫に曰はく「惲道生は筆墨縱横、意の如く、山水雄渾の趣を得たり。早年は氣厚力沈、全く董巨を摹せり。晩年は墨を惜むこご金の如く、儻然自遠、意興は倪黃の間に在り」と。此の軸、淡墨の鈎線を以て山形樹容を寫し、處處點苔を加へて、多く皴渲を施さず。大癡の筆意を追ひて所謂墨を惜むこご金の如きものあり。蓋し中晩年の作なり。墨色衰褪して稍精采を減ぜるは惜むべしと雖も、香山の書畫は傳世少し、珍護せざるべからず。

幅中鈴印の吳惟英は則ち題識に言へる國華にして、香山の交友なり。明詩紀事に依れば、惟英は字を國華と云ひ、先世は蒙古人把都帖木兒なり。爵は恭順侯にして、京營總督たりき。靜志居詩話に云はく「國華は累葉珥貂にして風流獨擅せり。崇禎中、鞏都尉永固と並びに心を圖史に留め、諸朝史と文酒謙遊の樂を極め、家に墨響齋あり。金石文字を摹拓し、裝池挿架、歐薛洪趙の富に減せず」と。乃ち此の軸は香山が畫きて國華に贈れる所たるは題識に依りて知るべく、國華亦之を愛藏せしは其の鈴印に依りて明かなり。

張風竹林高士圖立軸

高三尺九寸九分

闊一尺一寸

紙本

水墨を以て脩竹一叢を畫き、其の前に拱手逍遙せる高士を寫せり。寸大の草書にて款題して云はく

一竿兩竿脩竹。五月六月清風。何必徜徉世外。祇須嘯咏林中。

下に上元老人、大風の二印を鈴し、款上に小字を以て「作小畫并題六言、爲式翁老仁兄壽」と識せり。

此の軸は土坡人物を除く外、凡て淡墨を以て畫面を渲染し、幽黯の氣、紙表に洋溢せり。亦一種の手法なり。竹は濃淡參差として韻致頗る饒く、人物は恬靜閑適、神韻悠然たり。大風の畫は傳世絶だ少く、寸縑片楮も人之を珍とす。大風出色の作たる此の軸の如きは殊に獲易からず。宜なり舊主千金を投じて古錦の裝池に付せしこと。畫徵錄に云はく「張風は善く山水花草を畫けり。師承無く、己の意を以て之を爲り、頗る自得の樂あり。筆墨中の散仙なり」と。而も人物畫も亦大風の得意とせる所なりしは石渠寶笈三篇延春閣藏品中に其の「諸葛亮像」の一軸あるに徴して知るべし。

張風面壁達磨立軸

高三尺六分

闊九寸八分

紙本

墨畫。面壁趺坐せる達磨を寫せり。眼を張り、眉を揚げて瞋恚の相あり。草書款題に云はく、面壁則己、盍爲發怒、請問我師、中必有故。

上元老人畫并題

後に張風之印の一印を鈴せり。

大風は性幽僻にして奇行多し。甲申鼎革の後、帖括を焚き短後を衣、削髮を佩びて山水の間を放浪し。多く僧寮道院に寓して一たびも家を省みざりしといふ。其の人已に奇なり。筆墨の尋常町畦の外に出づる固に其の所のみ。此の達磨も亦古來の典型を超脱せり。蓋し寄託する所あるならむ。讀畫錄に云はく「大風の畫は師授する所なし、偶己の意を以て之を爲り、遂に化境に臻る。瀟然澹遠、幾ぞ墨路の尋ねべきなし。秣陵の畫家、臂を掉つて孤行する者は大風一人のみ」と。詩また秀警にして感慨多し。左に其の二を録す。

同劉旅皇看菊

黃花開石屋。歲晚足摩娑。飲酒亦逃世。哀時恒獨歌。地偏風露冷。江逼雁鴻多。即此成嘉遯。蒼生奈爾何。

田園卽事

樹底雲生隔淺苔。花開犬吠出危橋。緣林麥熟經晨雨。蟻岸船高入夜潮。計拙兒童諳稼穡。時違兄弟老漁樵。田園長更餘風月。村北村南酒滿瓢。

張風人物冊

高六寸七分

闊四寸八分

紙本

計十二頁

淡著色畫。每幅人物に加ふるに山水の小景を以てせり。末幅に「丙子秋八月之朔寫、上元老人張觀」の款識して大風、風の二印を鈐せり、丙子は崇禎九年なり。

大風は墨苑の散仙なり。家貧にして屋小く、風雨一たび至れば湫隘居るべからず。便ち書案の上に踞臥して晏如たり。出でては則ち多く僧寮道院に寓し、久しきに亙りて家を顧みず。頗る自得の樂ありきと云ふ。今此の冊に畫ける所は米顛拜石、李白觀瀑、公望垂綸、滄浪濯足等の故事なり。蓋し大風は畫を藉りて胸中の幽僻を洩らせしなり。

呂潛詩畫合裝卷

畫 高九寸一分

長四尺三寸五分

紙本

詩 高九寸五分

長二尺四寸五分

明末清初、畫を能くせし者は多く禹域東南の人なり。惟呂半隱は四川より出で、名を文苑に馳せたり。蓋し異數なり。此の卷を見るに北苑の手法を用ゐて參するに洋法を以てせり。即ち龔半千、吳漁山の類なり。丁未中春、畫于道峰之歸雲庵、西蜀石山居士呂潛の款識し呂潛

半隱の二印を鈐せり。藏印十又一あり。詩は行書、五言律二首。左に録す。

我憶支公久。相逢雲水東。紫衣行帝闕。錫杖倚天中。遇物情無着。當機應不窮。

誰教詞賦苦。字字寫秋風。

傾盡諸侯坐。依然苦行身。餅閒藏日月。杖底足風塵。好句題山編。孤懷對客親。

願師及春去。聊共歲寒人。

末に「贈無聲二律、書爲遠本老禪宗、西蜀呂潛」云款して、呂潛私印、半隱の二大方印を鈐せり。前に嘯樹軒の一印あり、詩書俱に流麗、雙美を稱すべし。又藏印五あり。

半隱は崇禎の進士にして、太常に官たりしが、明亡びて後は復出せず、吳興廣陵の間に隱る。ここ凡そ四十四年、竟に明の遺老を以て終へたり。故に詩に悲惻の調多し。今其の懷歸草堂集に依りて其の三四首を摘録す。此の卷の詩畫を併せ觀るべし。

登開元塔

漠漠河山盡朔州。紺宮曾與作邊籌。驚看白日憑飛屨。絕少黃塵到敝裘。

唐世何人分雁塞。宋家此地割鴻溝。于今北望休乘嶂。獨寄征人萬里愁。

石亭寺樓與友人話舊

江濤如雪亂飛鴉。客裏逢人漫憶家。杜宇叫殘巫峽夢。鷓鴣聲斷嶺南花。

天涯寄食無耕土。世外藏名有釣車。試看滕王遺蹟盡。西山空對晚煙斜。

上谷感懷

先司馬以崇禎癸未春總督保陽、距今三十四年矣、重到賦此

趨庭猶記少年遊。大纛威名易世留。上谷峰沈青海月。中原魂斷白雲秋。

麒麟臥宿三川草。蝴蝶驚回八渡溝。華表不歸遺老盡。斜陽立馬淚難收。

江望

橫江閣外數帆檣。立盡西風鬢漸霜。只有鄉心不東去。早隨烟月上瞿塘。

范文光草書五言古詩卷

高一尺二寸

長十尺八寸

綾本

范文光は崇禎の末年、川南巡撫として嘉定を守り、城破れ藥を仰いで死せり。草書を善くせるを以て名あり。此の卷は七八寸許の大草書にて五古一首を書せり。凡て二十七行、其の詩左の如し。

火族亂水國。長波吹溢雲。好雨不肯下。先聲常恐人。隔岸荻蘆響。颯颯來相聞。
神靈倏變滅。歌管漸次起。游兒冠明月。袞袞生翌奔。良夜巨疎笛。鼓角非其群。
獨有山寺鐘。幽幽清心魂。

後に「崇禎戊寅五月十一、游燕子磯、宿弘濟寺下、作書似兌生社丈、內江范文荑仲闇甫」の款識し、范印文光、范仲闇以字行の二印を鈐せり。

書法豪健宕磊。觀る者驚心駭目せざる莫し。所謂字字驚鴻怒鵠、筆筆紫電青霜の語、以て此の卷を評すべし。

祁豸佳做大癡山水立軸

高四尺九寸五分 闊一尺七寸八分 絹本

淡著色畫。款識に云はく「丙辰秋杪、做大癡筆、似而栗年世兄、山陰鑑湖長祁豸佳」云。豸佳、止祥氏の二印を鈐せり。丙辰は萬曆四十四年にして即ち此の畫は豸佳壯年の作なり。豸佳の畫は巨然に淵源し、黃大癡、沈石田の手法を併用して筆力挺拔、氣勢磅礴、特に士氣を以て勝れり。嘗て詩を賦して曰はく「青山白社夢歸時。可但前身是畫師。記得西陵風雨後。眞堪圖取大蘇

詩」云其の自矜を見るべし。東坡曰はく「士人の畫を觀るは天下の馬を閱するが如し、其の意氣の到る所を取る。乃ち畫工の如きは往往只鞭策皮毛、槽櫪芻秣を取るのみ、一點の俊發なし、看るここ數尺許にして便ち倦む」云。豸佳の此の軸を見て覺えず坡老の語を想起す。

祁豸佳書七言絕句軸

高五尺二寸五分 闊一尺四寸三分 綾本

草書。詩に曰はく

西津西望綠冥濛。流水花林秋映空。三山忽自飛靈雨。零亂金光日氣中。

「似征吉年詞宗、祁豸佳」云款し、下に祁印豸佳、止祥子の二印を鈐せり。

止祥の書は董其昌より出でて別に一格を成し、古勁の趣、卻つて玄宰に過ぐるを稱せらる。

止祥の父は名は承燦、字は爾光といひ、萬曆甲辰の進士にして家に澹生堂を築きて藏書の庫

を爲せり。止祥の兄は名は彪佳、字は幼文、天啓壬戌の進士にして崇禎乙酉、難に殉せり。父

兄皆學問風節の人にして止祥亦幼より詩書に涵濡せり。其の筆墨の勁挺峭拔群を抜けるも

のあるは、家門の流光たらずんばあらざるなり。

祁豸佳書七言絕句立軸

高三尺二寸五分 闊九寸九分 綾本

草書、詩に曰はく

日落沙明天倒開。波搖石動水縈廻。輕舟泛月尋溪轉。疑是山陰雪後來。
「祁豸佳」に款署し、祁印豸佳、止祥子の二印を鈐せり、藏印二あり。
字字遒勁枯淡、老松瘦鶴を見るが如し。明季、書を以て名ある者林の如くなりしも、止祥の右に出づる者寡し。止祥の書、觸目すれば吾齋必ず之を收むるは是が爲なり。

祁豸佳草書唐人詩卷

高九寸六分 長二十七尺七寸 紙本

草書。李太白の梁園吟及び襄陽歌を録せり、凡て一百行。末に「録太白句、祁豸佳書於招隱堂」に款し祁印豸佳、九品蓮臺主者の二印を鈐せり。
書は董玄宰に依倣して別に一種の風骨を具へ、簡鍊を奔放の中に寓せり、止祥の畫は邦人之

を知れるもの多し、而も其の書の非凡なるは之を知る者尠し。此の卷に就いて鑑眼を啓發すべきなり。

程正揆書題畫詩立軸

高五尺五寸五分 闊一尺六寸五分 綾本

草書。七言絕句一首、曰はく

柳標橫肩入萬峯。芒鞋踏破白雲封。溪溪瀑布盈春水。無俟探泉六一蹤。
款に云はく「題畫似叔龍詞兄正、程正揆」に。程印正揆、太史氏の二大方印を鈐せり。傳へ云ふ青溪道人の書は李北海を師こせり。今此の軸を見るに北海の筆意歴歴指すべし、縑素の潔淨なるは殊に喜ぶべし。

青溪遺稿を閲するに、此の詩は題畫十二首の一なり。但遺稿には「峯」を「重」に作り「封」を「峯」に作れり、孰が定稿なるを知らず。

程正揆江山臥遊第三十圖卷

高七寸七分

長五尺九寸

紙本

淡著色畫、山水なり。卷首に「江山臥遊圖、青溪道人」の款し、一箇間人天地間、正揆の一二印を鈐せり。末に「甲寅七月畫第三十」の識して青溪の橢圓印を鈐せり。鄧邦清、呂申、宮爾鐸等の藏印凡て六あり。引首に吳大澂の篆書「青溪臥遊第三十圖」の八字あり、拖尾に宮爾鐸外數家の長跋あり。

相傳ふ程青溪は一生中に江山臥遊圖五百卷を畫かんことを企てたり。數尺の短きもあり、數丈の長きもありて、繁簡濃淡各其の致を極む。五百の數果して畫き了れりや否を知らず。雖も各家の書畫錄に載録する所少からざるを以て推すも、其の畫さし數の頗る多きを知る。此の卷は其の第三十にして康熙十三年甲寅の作なり、老筆紛披、逸趣饒し。

羅牧水墨山水立軸

高六尺五寸九分

闊二尺四寸一分

紙本

墨畫。款題に云はく

獨愛江亭上。澄懷多所欣。故人松嶂外。疎磬隱斜曛。庚午畫 羅牧

こ、羅牧私印、飯牛の二印を鈐せり。庚午は康熙二十九年なり。羅牧は山水に於いて江西派の祖たり。張庚の論畫に曰はく「羅飯牛は甯都に崛起し、所能を挾んで省會に遊び、名、公卿士夫を動かせり。學者多く之を宗す。近ごろ之を江西派と謂ふ、蓋し失は易にして滑なるに在り」云。今此の軸を見るに樹木の描法、邱壑の皴染、自から一家を成し、渾淪蒼潤、兩ながら具はる。未だ遽に易にして滑なりと謂ふべからざるなり。

羅牧蘭亭書畫立軸

高六尺七分

闊一尺六寸七分

綾本

墨畫。江岸の景を寫し、上に寸大の楷書を以て蘭亭の一節を書せり。書と畫と相適はざるに似たり。蓋し山水を寫して興未だ盡きず。更に筆を援りて揮灑一過、以て其の胸懷を洩し、に過ぎざらむ。壬子夏六月、臨於章江客舍、羅牧と款識し、羅牧私印、飯牛の二印を鈐せり。潤之鑑賞、歐陽潤之珍賞の二藏印あり。

羅牧の畫は筆意空靈にして黃董の間に在りと稱せらる。此の畫を見るに毫尖稍禿すれども魄力は餘りあり。其の類を求むれば張瑞圖之に近し。

書は秀勁中に古趣を寓せり。羅牧の楷法に工なりしは著録皆之を言へるも、惟り梁山舟の孔谷園に復せる論書に云はく「羅飯牛名は牧、江西寧都の人、畫を以て名あり、詩を能くし、亦楷法に工なり、其の人となり古道に敦く友誼を重んず、宋牧仲はその人を高しこし、二牧説を作りて之を贈れりこ。これ張瓜田畫徵録に載する所なり。今刻する所の黃庭數行に據るに未だ甜俗を免れず、書卷の氣無し。看來れば其の胸中蘊釀する所無く、一の作畫題詩人に過ぎざるのみ」こ。詆訾至れりこ云ふべし。山舟は書法の專家を以て自矜すれども、刻本の黃庭數行によりて、直に其の人の能否を斷ずるが如きは、輕率の誚りを免れざらん。今此の軸の楷法を以て之を山舟に較ぶるに、俊逸の氣は却つて飯牛に多きを覺ゆ。

八大山人芭蕉小禽圖立軸

高五尺八寸四分 闊二尺二寸四分 紙本

水墨を以て芭蕉秀石を畫き、淡彩を用ゐて小禽四羽を寫せり。「壬申之重陽涉筆、八大山人」こ款識して加、八大山人の二印を鈐せり。小禽の描法巧細にして、常に見る所の山人の手法に似ず。乃ち知る山人は縱恣奇逸の外に別

に細緻の筆ありしことを、而して細緻の畫は尤も超妙にして、亦尤も得難し。朱耆が自ら八大山人と號せしは甲申鼎革の後なり。八大の二字、必ず其の筆畫を聯綴し、山人の二字亦然り。一見して「笑之」の如く、又「哭之」の如し。蓋し寓意の存する所なりこ云ふ。此の軸は康熙三十一年の作なり。

八大山人山水立軸

高一尺六寸七分 闊一尺三寸三分 紙本

墨畫。「八大山人」署し、印は加、可得神仙の二を鈐せり。加は八大山人の四字を合併せる花押なりこいふ。或は云ふ、明の字を倒壞せるなりこ。右方下角に遙屬の長方印あり、亦山人の印章なり。孝禹藏書畫印、筠軒珍藏の二藏印あり。孝禹は王瓘なり、金石家の泰斗にして又著名の收藏家たり。

崇禎甲申、明の社稷覆没するに當り、殷頑周黎、多く遁れて空門に入る。石谿、漸江、石濤、八大山人の如き即ち是なり。其の作れる詩畫は或は遺民を以て其の悲憫を寄せ、或は宗室を以て其の流離を痛む。皆其の心史の哀を寫すにあらざるは無し。今此の軸を見るに山巒は眠る

が如く、樹木は躍るに似たり。反筆仰抹して奇なること人意の表に出づ。正に是れ一幅無聲の離騷なり。

此の軸は紙色潔淨、墨彩尙鮮なり、殊に喜ぶべし。

八大山人荷鷺圖小軸

高三尺五寸二分 闊一尺一寸三分 紙本

荷花の下に小鷺を畫き、「八大山人寫」と款して八大山人、何園の二印を鈐せり。

松石荷鷺は山人得意の圖なり。墨瀋淋漓、筆情縱姿。成法に泥まず、奇致人を驚殺す。亦是れ託して以て胸中の鬱勃を洩せるものに似たり。

八大山人破荷鷺圖立軸

高五尺九寸三分 闊一尺四寸七分 絹本

墨畫。敗殘の荷葉を畫き、下に一瘦鷺あり、石上に立ちて池中の魚を狙ふ。隻脚にして斜視、頗る奇異を極む。「八大山人畫」と款して加、八大山人の二印を鈐せり、下に藏印一あり。

徐天池嘗て墨筆を以て鷺を畫き、自ら題して云はく「霹靂一聲響。衆鳥皆藏迹。鷺鷺躲入破窰中。染得一身都是黑。」詠。謔人をして頤を解かしむ。此の八大山人の鷺も亦墨筆黯黑、鳥の如し、天池をして之を見しめば應に又此の詩を以て之に題せむ。

八大山人游魚圖立軸

高五尺一寸二分 闊一尺四寸一分 紙本

十數の細鱗、一大奇石を遶りて游泳す。畫家の習氣を脱盡して奇想天外より來る。「甲戌之冬日、八大山人」と款識し可得神仙、八大山人の二印を鈐せり、康熙三十三年の作なり。

山人の畫は一木一石、一鳥一魚、皆怪奇を極め、人意の表に出でざるはなし、蓋し山人は或は哭し、或は笑ひ、笑つて而して畫を作れり、狂怪人を驚かす所以なり、而も其の心事を想へば、一片惻惻の情に勝へざるものあり。山人の畫は山人の心を以て之を讀まざるべからざるなり。

八大山人山水立軸

高五尺二寸六分 闊一尺五寸

綾本

淡著色畫。雲烟の裏に遠山近峯、出沒變幻の致を極む。山人獨得の手法なり。「八大山人寫」款し、加、可得神仙の二印を鈐せり。

邵長蘅の八大山人傳贊に云はく「予山人と寺に宿せしとき、中夜漏下し、雨勢益々怒り、簷溜潺湲、疾風窓扉を撼かし、四面の竹樹怒號して空山虎豹の聲の如く、悽絕幾と寐を成さざりき。若し山人方鳳、謝翱、吳思齊輩に遇はば、又當に相扶攜し慟哭して聲を失するに至りしならむ。愧らくは予其の人に非ざりしを」と。想ふに山人は宗室の身を以て滄桑の變に遭ひ、其の怫鬱不平の氣、發抒するに由無し。故に其の作れる書畫には飄逸の裏に悲憤を寓し、奇矯の間に沈痛を藏せり。

八大山人書韓文立軸

高七尺八分 闊二尺六寸七分 紙本

大行書七行。送李愿歸盤谷序の一節を書せり。八大山人と款を署し、下に在芙山房、八大山人の二印、右方上に薦艾の一印を鈐せり、藏印二あり。山人の書は顔魯公より出で、尤も雄勁

を極む、其の蹟は敢て稀なりといふにあらざれども、大字巨軸、此の如きは甚だ多からざるなり。

八大山人書畫合璧冊

高七寸五分 闊五寸八分 紙本 計十六頁

花鳥山水を畫き、配するに對題を以てせり。畫八幅、書八幅、合計十六幅。即ち左の如し。

第一幅 游魚を畫き、上に行書題あり「臨鍾太傅書兼畫、八大山人」款し加の印を鈐せり。

第二幅 奇鳥を寫し、加の一印を鈐せり。

第三幅 行書五言排律一首、「戊寅之三月六日、傲雲林畫、并書」款識し加、可得神仙の二印を鈐せり。

第四幅 傲雲林の山水、加、遙屬の二印を鈐せり。

第五幅 五言古詩一首、款に云はく「游雙峯艸堂詩、八大山人畫」加、可得神仙の二印を鈐せり。

第六幅 著色山水、即ち前幅詩中の雙峯艸堂の景なり、加の一印を鈐せり。

第七幅 送李愿歸盤谷序の一節を録せり、「八大山人畫」に款し加の一印を鈴せり。

第八幅 水墨山水、即ち盤谷の圖なり、加の一印を鈴せり。

第九幅 楷書、四言題句、八行、「臨歐陽詢書、八大山人」に款し加、可得神仙の二印を鈴せり、

第十幅 墨畫牡丹、加の一印を鈴せり。

第十一幅 五言律詩一首、「韋蘓州詩、八大山人書于雨絲花片時、兼畫」に款識し加、可得神

仙の二印を鈴せり。

第十二幅 著色山水、加の一印を鈴せり。

第十三幅 著色山水、白箋、全冊皆淡黃紙を用ゐたるに此の一幅のみ白牋を用ゐたり。

第十四幅 蘭亭序、「八大山人臨王逸少書」に款し加、遙屬の二印を鈴せり。

第十五幅 五言排律一首、「八大山人」に署款し加、可得神仙の二印を鈴せり。

第十六幅 水墨山水、加の一印を鈴せり。

以上十六幅、題する所は皆畫く所に適へり。畫を見て而して題を讀むに、清趣津津として盡きず、例へば第一幅と第二幅の畫は游魚と奇鳥にして、其の題は之を鍾繇の語に取れること左の如し。

盖張樂於洞庭之野、鳥值而高翔、魚聞而深潛、豈絲磬之響、雲英之奏、非耶、皆所愛已差、所樂迺異、審已恕物、斯爲得之。

第三幅に歲月を記して戊寅三月とあり、戊寅は康熙三十七年なり。即ち此の冊は山人最晩年の作たるを知る。冊中隨處に高邕歡喜、定丞珍賞、得一步想齋珍藏等の藏印あり、高邕は仁和人、上海に住し著名の書家にして、また鑑賞家たりき。

八大山人書唐詩冊

高一尺三分 闊六寸五分 紙本 計二十二頁

三四寸許の太行書。五言長篇を録せり。末頁に「丙子十二月既望、偶閱盛唐人詩、書之。八大山人」に款識し、可得神仙、八大山人の二印、又冊首に遙屬の一印を鈴せり、沈梧其の他の藏印數方あり。丙子は康熙三十五年なり。

八大山人の畫の妙は世之を知らざるものなしと雖も、其の書に至りては之を知らざる者多し、楊大瓢は山人の書を評して曰はく「指甚しく實ならずと雖も而も鋒中し肘懸して鍾王の氣あり」と。又曰はく「古人但黃魯直が瘞鶴銘を學べるを知りて、魯直以前には則ち唐の張嘉

貞あり、魯直以後には則ち明の八大山人有るを知らず。山人の書は其の淵源固に遠く、尤も力を得たるは王大令、顔魯公に在り云ふ。此の冊を見ても此の説の多く誤らざるを覺ゆ。

八大山人喬松圖大軸

高六尺一寸八分 闊三尺 紙本

水墨を以て老松一株を寫し、上方に款題して曰はく、

南東西北皆松樹。唯岳森然恍然遇。曾是秦封爲大夫。却倚燕臺莠盤在。

太白山頭霞正忙。仙妃往往笙翱翔。少室想像寫聊傍。黃樹雨白天青蒼。

玉龍久屬驂驢種。何如一曲郢人山翠聳。七十二峰齊切雲。崧高此月測星拱。

寤哥艸堂寫 八大山人

下に八大山人、何園の二印を鈴せり、又上方の樹幹に傍ひて一印あるも印文讀み難し。

此の軸の畫松は迥に恒蹊に異なり。樹幹は水墨にて渲染し、鱗甲を施さず。枝葉婆娑として醉翁の手の如し。氣象磅礴、興會淋漓。其の下筆の時、眼中人無かりしを知る。題詩は拳大の行草書にして、骨力沈雄、高く時流を抜けり。山人の畫軸に題詩あるは絶無に近し、これ此の軸

をして倍々重きを爲さしむる所以なり。

寧靖王草書立軸

高四尺二寸四分 闊一尺四寸四分 典五紙 本

草書。七言二句。

萬事不如盃在手。一年幾見月當期。

「天球柱」署款し、寧靖王の大印を鈴せり。

寧靖王は明の宣宗九世の孫なり。魯王と共に鄭成功に奉ぜられて福州に居り、永曆十六年壬寅(康熙元年)成功卒して後、臺灣に徙り、赤嵌城に住せり。康熙二十二年、清兵澎湖島を攻めて之を陥いる。成功の孫、克塽將に降らんとし、王乃ち自殺せり。時に年六十有二、その臺灣に居ること二十餘年なりき。王は美髯宏聲、書翰を善くし、佩劍を喜び、沈勇寡言にして兵民咸く之を尊禮せり。その回天の大業、遂に爲すべからざるに及び、王乃ち冠服を具し、天地祖宗を拜し、王の印を克塽に授け、左右に別飲し、從容として死に就けり。侍姬袁氏、蔡氏、荷姑、梅姐、秀姑みな殉死せり。事は臺灣紀事、臺灣外紀、小腆紀傳等の諸書に詳なり。王の廟社は

今鳳山竹瀝庄に在り。五妃の墓は臺南城外に存す。王は倒瀾を既倒に回すの畧無かりしと雖も、一死以て宗社に殉せり。惜い哉王の事蹟は汎く世に傳はらず、其の墨蹟の如きは更に罕睹に屬す、此の軸は三百餘年、南陲溫濕の地に藏せられ、剝蝕少からざれども、幸に文字印章を傷けず、海内の孤本、寶愛せざるべからざるなり。

盛茂燁松石藤蘿圖立軸

高五尺二寸五分

闊三尺三寸

絹本

著色畫。山水人物なり。右方上に大行書を以て「松石偏宜古、藤蘿不計年。崇禎庚午小春既望寫、盛茂燁」と款題して下に盛印茂燁、研庵居士の二印、前に烟霞癖の一印を鈐せり。庚午は崇禎三年なり、左方下に清嘯齋の一印あり。茂燁の山水は頗る烟林清曠の概を具へ、人物は精工典正なりと稱せらる。邦人古來頗る之を重んじ、往往數千金を投じて惜まざるものあり。茂燁が山水の能手たるは固より論無きも而も明末畫苑の大宗を數ふれば儂指するに違あらず。今惟茂燁を云爲するは其の何の故たるを知らず。要するに見聞の廣からざるに坐するのみ。

盛茂燁水寒秋晚圖立軸

石渠舊藏

高三尺七寸

闊一尺四寸

綾本

淡著色畫。右方上に「水寒深見石、秋晚靜聞風」の題句ありて「崇禎丙子清和、寫似敬詞兄、盛茂燁」と款識して下に盛印茂燁の印を鈐せり、乾隆御覽之寶、三希堂精鑑璽、石渠寶笈、乾隆鑑賞、宜子孫の五璽あり。左方下に賜本、臣金士松敬藏の二印あり、即ち曾て乾隆内府より侍臣金士松に下賜せられたる物に係る。時款の丙子は崇禎九年なり、前に掲げたる松石藤蘿圖は平生見る所の研庵自運の筆なれども、此の軸は細筆峭秀、全く別種の手法を用ゐたり。蓋し倣古の作ならむ。

戴本孝枯樹圖立軸

高五尺五寸五分

闊二尺八寸一分

紙本

渴筆を以て枯木數株を寫し、梢頭に一群の寒禽あり、樹形槎枒偃蹇。筆意枯淡蕭條にして、深く元人の風韻を得たり。款題して云はく

畫裡江鄉宛樂郊。西田老屋憶蓬茅。百年枯木蕭條甚。賸有寒鴉補舊巢。

庚申六月、初窓先生六十初度、倣前人意作此圖、并題以侑、庚弟鷹阿山樵本孝拜識
下に本孝、鷹阿山樵の二印を鈐せり。庚申は康熙十九年なり。

桐陰論畫に云はく「戴本孝の大幅は見るこゝろ罕なり、作る處の卷册小品は雅に程穆倩と筆意相似たり。蓋し穆倩は務めて蒼古を爲りて窠臼を脱盡し、鷹阿は法を枯淡に取りて韻致饒かなり。兩家の畫、各長ずる所あるなり」と、大幅存する稀なりとせば此の軸の如きは亦珍重せざるべからず。

戴本孝山水卷

高一尺三分

長十三尺四寸

紙本

墨畫。枯筆擦過して筆力古健。布局奇異にして常蹊を超絶す。蓋し此の翁の長所なり。卷末に七言古體一首を題し、「戊辰秋九月、作於鳩江之來雲居中迢迢谷口、鷹阿山樵本孝」と款識し、前に安禪制毒龍の一印、下に務、旃、形見神藏の三印を鈐せり。戊辰は康熙二十七年にして山樵六十八歳なり。下角に祖孫父子三世科甲人家の一印あり。

龔賢紫翠衆嶺圖立軸

高七尺四寸一分

闊三尺二寸三分

絹本

墨畫。半千獨特の筆を以て谿山の大景を寫せり。濃墨淋漓として縑素潤へるが如し。款題に云はく「北苑の筆、半千の畫、沈雄深厚老蒼たり。惜むらくは秀韻足らざるが如し。款題に

秋空彌紫翠。衆嶺積迢迢。居者陶貞白。賓來王子喬。吹笙浮靄盡。放鶴碧天高。不待斜陽入。涼蟾隔樹梢。

「半畝龔賢」と署款して龔賢之印、半千の二印を鈐せり。下角に臥雪齋藏の小印あり。畫徵錄に云はく「半千の畫筆は北苑の法を得、沈雄深厚老蒼たり。惜むらくは秀韻足らざるのみ」と。思ふに倪雲林が枯淡の筆を以て千古の風韻を傳へしより、後世徒に乾皴渴擦を以て逸致を得るの法を爲し、濕潤の筆を見れば目して秀韻足らずと爲す。何ぞ知らん北苑華原は未だ嘗て一筆も枯燥を用ゐざりしを。畫徵錄の言ふ所は偏阿の論たるを免れず。

龔賢山居圖立軸

半千の畫に濃淡二様あり。紫翠衆嶺圖は其の濃なるものにして、此の軸は其の淡なるものに屬す。款題に云はく

農牧漁樵同處家。黃茆屋子倚山涯。等閒相返如泥醉。酒滿餅盃不用餘。

「龔賢畫并題」と署款し、半千の二印を鈐せり。下方に士元珍藏、麓雲樓書畫記、周夢谷珍藏印、陸樹聲鑑賞章の四印あり、此の軸紙色清淨、墨氣煥發。龔作の佳品なり。

龔賢倣北苑山水卷

高八寸七分

長三十一尺一寸五分 紙本

墨畫。董北苑の筆意を以て江山を描出せり。無款なれども一望して龔半千の作たるを知る。三丈有餘の長卷なり。一たび之を展ぶれば奇景百出し、送迎違あらず。黝鬱幽深、煙嵐紙上に漲る。蓋し龔賢の巨製なり、藏印六あり。龔賢は詩を能くし、晚年清涼山に隱れて中晚唐詩紀を選めり。龔賢の畫が一種風致の及ぶべからざるものあるは詩意を以て筆を驅れるが故なり。世人多くは六法の龔賢を識りて、詩家

の龔賢を知らず。左に其の數篇を録し龔畫鑑賞の資に供す。

勒馬瞻東岱。嵯峨勢獨尊。半空懸日觀。一竇仰天門。氣接荆吳白。雲歸齊魯昏。

久虛封禪事。碑碣幸長存。登岱

扁舟當曉發。沙岸杳然空。人語蠻煙外。鷄鳴海色中。短衣曾去國。白首尙飄蓬。

不讀荆軻傳。羞爲一劍雄。扁舟

與爾傾盃酒。閒登山上臺。臺高出城闕。一望大江開。日入牛羊下。天空鴻雁來。

六朝無廢址。滿地是蒼苔。與費密登清涼臺

登眺傷心處。臺城與石城。雄關迷虎踞。破寺入鷄鳴。一夕金笳引。無邊秋草生。

橐駝爾何物。驅入漢宮營。登眺傷心處

江上誰傳戰鼓來。流亡士女閨如雷。月明今晚天街靜。十二城門到曉開。揚州曲之一

避賦還須先避兵。六街鷄犬夜無聲。粧樓半掩美人盡。茉莉花開香滿城。揚州曲之二

徐枋蘭石圖立軸

高五尺三寸

闊一尺八寸四分

絹本

墨畫。濃墨を以て石を畫き、下に幽蘭靈芝を配せり。款題に云はく

隱者採芝以療饑、神仙餌芝以長生、古來真隱、去仙不遠、所以梅子眞世傳仙去、陶隱居自步
白日升天也、余山居之暇、好寫墨芝、伴以幽蘭、俯以介石、碧蘚無塵、清泉可掬、隱乎仙乎、可
以寄我之微尙矣。己巳新秋日、畫於澗上草堂并題。 俟齋徐枋

後に徐枋之印、俟齋、秦餘山人の三印、右方上に雪牀庵の二印、下角に徐氏俟齋畫記、笠山笠水
間、居易堂印の三印を鈐せり。己巳は康熙二十八年にして徐枋六十八歳なり。

徐枋は明の遺老にして尤も詩書畫を以て著はる。山水は平板の嫌無き能はざれども、其の好
んで畫ける芝蘭は一支一莖、悉く神に入り、頗る趙子固の遺韻あり。王漁洋の齋中三咏に、金
俊明の畫梅、王先承の草書と相伍して徐枋の芝蘭を數へたり。以て當時の聲價を察知すべし。
明清交迭の際、天下功利の士、競ひて仕を新朝に求むるに當り、俟齋は挺挺として獨り清節を
持し、敢て二臣の伍に列せざりき。商山の芝、楚畹の蘭、鬱鬱菁菁たり、徐枋取りて之を毫端
に寫し、以て胸裡の鬱懷を洩せり。百歳の下、誰か其の志を悲んで其の筆を賞せざらんや。

徐枋書五言律詩立軸

高三尺八寸二分 闊一尺一寸八分 紙本

草行書四行。詩に曰はく

晨興步北林。蕭散一開襟。復見林上月。娟娟猶未沈。片雲自孤遠。叢篠亦清深。
無事由來貴。方知物外心。

「壬申冬月偶書、俟齋徐枋」款識し、下に徐枋之印、俟齋、秦餘山人の三印、右方上に雪牀庵の
一印を鈐せり。下角に濃華野館張氏珍藏の藏印あり。
壬申は康熙三十一年にして、徐枋七十一歳、即ち其の歿前二年なり。徐枋は甲申國變の後、南
瓜を種ゑて自ら給し、肯て出て仕へず、人其の行を高しとせり。靜志居詩話に云はく「江左得
其書畫、不啻珊瑚鈎也」。當時珍重せられしこと想ひ見るべし。

徐枋瑞芝詩立軸

高三尺八寸三分 闊一尺六寸九分 紙本

草行書四行。詩に云はく

九芝誠神瑞。叢生幽涯側。醴泉漱其英。甘露潤其色。丹紫耀符采。含玉比粹質。

貌矣不可攀。名壽知必得。

款識に云はく「右瑞芝詩十二首之一、辛未夏日偶書、俟齋徐枋」云、徐枋之印、俟齋、秦餘山人の三印を鈐せり、右方上に澗上草堂の印あり、辛未は康熙三十年にして徐枋七十歳なり。徐枋の書は十七帖及孫過庭書譜を宗とし、靈妙神に入れり、と稱せらる。

姜實節崇山峻嶺圖小軸

高一尺六寸八分

闊九寸一分

紙本

墨畫。主山を畫き山腰繞らすに雲烟を以てし、下平坡に至り、溪流斷橋、村落松林あり。上方に隸書を以て「崇山峻嶺」の四字を署し、後に款題して曰はく

錢塘江上雨星星。目斷龍山淚欲零。

白塔諸陵埋骨處。祇今誰復種冬青。

唐義士葬宋諸陵在山陰之蘭亭龍山之北、萊陽姜實節并記、乙酉六月、

後に姜印實節、小字思未、學在の三印、前に萊陽の二印、左方下に姜中子の一印を鈐せり。乙酉は康熙四十四年なり。實節は明の永曆元年（即ち順治四年）に生まれ康熙四十八年に卒せり。此の軸は即ち其の歿せる四年前の作なり。

實節は書畫俱に倪雲林に私淑し、頗る清逸蕭散の致を得たりと稱せらる。桐陰論畫に云はく「峯巒簡淡、林木蕭疎、備さに清曠の致を極む、但落筆甚しく謹嚴ならず、處處荒率の態あり。蓋し荒率は是の所長にして亦是の所短のみ」云。今此の軸を見るに蕭疎簡淡は洵に能く雲林に神似すれども、稍々荒率の嫌あるは祖永の言へる所の如し。然れども熟ら詩意畫境を案ずるに、これ尋常の荒率にあらずして別に寓意あるを想はしむ。蓋し此の圖を作れる乙酉は、甲申國變後六十年に當り、社稷覆亡して日既に遠きも、生殘の遺民未だ前朝を忘るゝ能はず、筆墨を藉りて胸裡の抑鬱を洩せるもの、如し。詩畫に悽惋悲愴の調あるは良に以あり。觀者尋常一様の山水を以て之を目する勿れ。

杜大綬枯木竹石立軸

高二尺四分

闊九寸九分

紙本

渴筆を以て枯樹を寫し、下に磊塊たる石と叢竹萱草とを配せり。款なし。下角に杜印大綬、子紆氏の二印を鈐せり、詩塘に小楷書枯樹賦を書し、後に款識して云はく、

余不善畫而喜畫、每於明窓淨几、輒欲弄筆墨、以寫無聊之懷、茲枯木、迺壬子歲、於黃河舟中

所圖、偶檢出、復書庚信賦于其上、亦藉以爲重耳、觀者得無哂其不憚煩乎、萬曆甲寅七夕後一日、杜大綬識。

下に子紆の連印を鈴せり、即ち萬曆四十年壬子に枯樹を畫き、同四十二年に枯樹賦を書せしなり。子紆は自ら稱して畫を善くせずと云ふも、其の山水は世許すに逸品を以てせり。此の軸また逸趣饒く、尋常作家の畫にあらず。

許友題畫詩立軸

高四尺八寸七分 闊一尺四寸五分 絹本 蠟箋

草書、四行。七言絕句一首。

群花下土在清明。菊種分苗着水輕。還見萬陰隣岸裏。乳鳩傍母習春聲。
「題畫、似蔚杜兄、許友」款し、許友私印、甌香館章の二印を鈴せり。
此の軸に雙鈎廓填の摹本あり。余曾て某處に於いて之を見き。

許友紅橋覓酒詩立軸

高七尺二寸 闊二尺七分 絹本

草書、七言律詩一首、

二十四橋野水邊。平山堂蹟渺如煙。竹籬繞岸藏書屋。柳檻垂波卷鶴田。
燕子歌殘明月地。荷花香滿夕陽舡。先生醉客情無倦。猶泊紅橋覓酒泉。
款に「友眉」署して許印友眉、甌香、眉道人の三印を鈴せり。絹素稍く黯けれど濃墨を以て揮洒したれば精采特に煥發せり。
許友は初め倪鴻寶に就いて詩書畫の指授を受けたりと云ふ、其の書の逸宕なるは天分の然らしむる所ならんも、之を鴻寶に得たる所また少からざるが如し。

許友書五言律詩立軸

高五尺五寸 闊一尺五寸三分 絹本

草書、四行。

柳葉作齋隣。西風動綠蘋。邨圍山色古。溪漲水痕新。籬落知前輩。衣冠見老臣。
能令懷想處。不厭在山人。

後に「題星溪堂圖之一許友」署款し許友之印、有介書畫の二印を鈐せり。第二行末四字を誤寫して抹點を施せり、磊落物に拘らざる所。却つて妙味を見る。藏印五あり。

許友書七絶二首詩立軸

高四尺六寸九分

闊一尺八寸八分

紙本

草書、五行。七言絶句二首、每首の末に詩題を書せり。

盡日溪山半曇曇。野僧知是未歸門。巖花生得山齋滿。倦客烟波老眼昏。

送生長子歸白下

層巒聳翠與雲齊。瀑布從空兩道溪。還鳥飛來又飛去。不堪今夜聽猿啼。

宿杜門之作

「許友」署款し許印友眉、甌香の二印を鈐せり。

姜宸英は許友の書を評して云はく、群鴻海に戯れ、孤鶴空を摩するが如し。梁章鉅は云はく「許友の書、雄健の處は王孟津に酷似せり、明季の書派此に類する多し、即ち黃石齋先生の筆意も亦相似たり。但黃は奇放の處あり、又謹嚴の處あり。此は則ち一味奇放なり。黃は流傳

する所に精行楷尙多し、而して許友の遺蹟には一の楷書なし、稍々異なりと爲す耳」と。此の軸はもと福建の故家の藏たり。南方は熱濕の地、書畫の保存に適せず、故に紙素に蠹蝕の痕あれども、書は則ち雄快奔放にして、眼中古今を空うす。王孟津、傅青主と雖も此に至りて遂に一籌を輸せざるを得ず。數十年來見る所の許友の書は、是を以て甲觀とす。

許友自書詩帖册

高八寸一分

闊四寸五分

紙本 計三十六頁

草行書。自作詩凡て四十一首を録せり。款無しと雖も一望して許友の書たるを知る。詩句の構思未だ定まらざるには空處を存せり。其の初稿たるを知る。紙素蠹蝕し、美觀を損すれども、字は概ね完好なり。匆匆の筆、却つて超脫自然の妙を極む。

錢牧齋は常に許友の詩を喜び、撰する所の吾彙集に其の詩を載するこゝ尤も多し。朱竹垞は許友の詩を稱して俊鶻生駒、施すに羈勒を以てすべからずと云へり。推重想ひ見るべし。試に此の册に録する所の三四首を左に掲ぐ、

送客

女螺江畔小梅新。脈脈秋寬點點春。遠水凝眸何意綠。寒山如黛不禁顰。
花飛誰是傷心客。月落余爲中酒人。三萬六千容易擲。半疑幻夢半疑眞。

夜坐卽事

對影自憐予。寒燈若夜虛。聽移三徑雨。靜疊半床書。酒醒無殘夢。天荒耐索居。未肯就
于戈通年歲。身世竟何如。
大塊偶生子。應令歲月虛。逢場無一枝。養拙有藏書。性癖禽魚樂。情忘木石居。賦詩
上林那解賦。四壁愧相如。

清明坐雨

何地踏歌行。幽居動遠情。山川猶戰伐。風雨自清明。濕葉粘花片。低枝聚鳥聲。
持杯對芳艸。莫使火愁生。

許遇畫石立軸

高四尺一寸二分 闊九寸五分 畫石之狀 紙本
淡著色にて奇石を畫き、上に題して曰はく、予の許遇は許友の子にして梅竹松石

海雲縹渺凝秋碧。吞吐水輪山影窄。琳瑯鍾毓不世期。應許人間同愛惜。

丁未仲夏 許遇詩畫

下に許遇之印、不棄の二印を鈴せり。丁未は康熙五年なり。許遇は許友の子にして梅竹松石
を畫くを以て名あり。詩法を王漁洋に受けたり、漁洋集中に其の畫竹に題せる詩に曰はく
「許侯磊落負奇氣。平生節目堅蒼筤」と、以て其の人を爲りを知るべし。

文點壽伯兄詩立軸

高四尺四寸七分 闊一尺七寸三分 紙本

行書。七言律詩四首、後に款識して云はく、

伯兄弓云先生、蕭閒澹遠、志趣高曠、少時同遭家難、流離奔竄、年四十、卽隱居石湖之濱、藝
花種竹、與世相忘、與之相對、如寒巖深谷、蘊藉自將、人見之、若天半朱霞、可望而不可攀、卽
我兄弟中、如兄之爲人者絕少也、今丁丑春、值兄七十大慶、敬賦四詩、奉呈教政、聊當勸酒、
中間稍涉亂離聚散、不無有消沈搖落之感、望兄恕而許我乎、恐不足教一咲也、三月二十又二
日。
竺塢南雲弟點再拜具草

竺塢、吾與點也、文與也、點の四印を鈴せり。

丁丑は康熙三十六年にして、南雲五十六歳なり、南雲は高祖衡山の家學を承きて、書畫俱に一時に名ありき。此の軸は衡山の筆意ありて、適逸却つて之れに過ぎたり。文氏の後嗣みな斐然として章を成し、家法を墮さず、盛なりと云ふべし。

釋明綱書樂志篇立軸

高六尺貳分

闊壹尺七寸

絹本

行書、七行。樂志篇を書せり、歐楮を追蹤し、文董の時風に籠蓋せられず、別に一種の風趣を見る。識款に「崇禎歲次丁丑仲冬十有八日、書於綠天庵中、虎林明綱」とありて釋印明綱、宗朗の二印を鈴せり、右方上に綠天庵の一印あり。張鹿樵は其の自怡悅齋書畫錄に明綱の書を論じて「筆法適健にして頗る臺閣の氣象あり、僧家の書に類せず」と云へり。此の軸を見れば其の所論の誤らざるを知る。

王槩秋澗觀雲圖大軸

高十一尺七寸八分

闊四尺三寸六分

紙本

淺絳の秋景山水畫。大壁紙上恣に揮灑して毫も窘縮の痕無し。之を大堂に掛けて遠く望めば、山川亭榭、樹木人物、凡て自然の大景に接するが如し。王槩は大幅を作るに妙なりとは古來傳ふる所なり。此の軸を見て果して其の然るを知る。上方に隸書を以て匡廬雲海歌を録し、「癸酉秋八月、繡水王槩」と款識し、王槩之印、安節子の二印を鈴せり。左方下に鴛鴦莫愁兩湖漁子、意在仲圭黃鶴青籐白石之間の二印あり、亦王槩の印記なり、時款の癸酉は康熙三十二年なり。

劉度倣趙大年雪景山水卷

高八寸五分

長七尺四寸

絹本

劉度は字を叔憲と云ひ北宋人を師法として其の神髓を得たりと稱せらる。此の卷は宋の趙大年に倣へる平遠の冬景山水なり。卷尾に「崇禎戊寅倣趙令穰畫、劉度」と款識し叔憲の小印を鈴せり、下角に見る到處雲山是我師の二印は亦叔憲の印記なるが如し。卷首に藏印二方あり。

叔憲は初め藍田叔の門に出づ云ふも、今此の巻を見るに田叔獲悍の習は一掃して絲毫の
噪氣を見ず。傳ふる所の田叔門下云へるもの信ずるに足らざるを覺ゆ。明末の作家は多く
董玄宰の餘風を承け、方めて南宗を學び、工緻を捨て、疎豪を尙び、技巧を避けて神韻を追へ
り。流弊の極まる所。竟に朦朧の雲、無根の樹を畫いて、大に二米の神髓を領畧せりと號し、
北宋の畫風は殆んど絶響に瀕せり。此の時に當り尙宋人の法燈を將に滅せんとするに繼げ
る者は洵に寥寥たり。而して叔憲の如き亦其の一人たり。今此の巻を見るに悠揚暢舒の筆
致、人をして眞に宋畫に對するの思あらしむ。圖繪寶鑑に叔憲を論じて「山水は北宋を摹し
法を李營邱に得ること多きに居る。水澤山村、平林險谷、危磯飛泉、斷橋絕壑より風雨晦月、
煙霞霽雪、種種寫し難きの狀に至るまで彼は手腕に於いて之を得たり。見る者歛衽せざるな
し」と云へるもの良に當れるを覺ゆ。桐陰論畫に謂ふ所の「布置細密なるも竝に靈警生動の
韻なし」とは好む所に阿ねるの言に過ぎざるなり。

蕭晨雪江訪友圖立軸

高五尺一寸九分

闊一尺六寸八分

絹本

墨畫。天色暗澹、山川凍合の景、寫し得て荒涼冱寒の致を極む。亭樹大馬は細筆を用ゐ、樹木
は李營邱を倣へり。「蕭晨」と署款し蕭晨の印を鈐せり。蕭晨の畫は山水の趣を來り、
李流芳曰はく「古人雪を畫くに、淡墨を以て樹石を作り、水天の空處には則ち粉を用ゐて之
を填し、此を以て奇と爲せり。余意ふに此の墨填は皆其の形似を求むるもの耳、筆を下し颯
然として紙上に飄瞥掩映するは乃ち眞の雪なり」と。此の軸を見るに正に檀園の云ふ所に合
するが如し。雪景は蕭靈曦得意の圖なれども、此の軸は特に筆法精緻、布局曠空を極む。蓋し最も刻意的
作なり。

蕭晨樹下賞雪圖卷

高一尺一寸六分

長四尺八寸七分

絹本

著色畫。卷末款題して云はく、春爲花氣味。寒是樹精神。白畫幾枝雪。青天無點塵。詩歌風外韻。尊酒意中人。
閒院眞虛寂。生機照眼明。

「蕭晨」に款署し蕭晨之印を鈐せり。
蕭晨は唐宋を師とし、特に畫雪は名手を以て推さる。居常梓人の中に隠れ、人之を工人とし
て役すれば、往役して直を受け、人之を待つに詩人を以てすれば、則ち朋友の禮を行へりこ
云ふ。其の人を爲り既に奇なり。其の畫の超俗なること知るべきなり。此の卷筆致精勁、傅色
古厚にして、意は宋元の間に在り。

李寅山居圖立軸

高六尺一寸四分

闊三尺一寸五分

絹本

邱壑澗泉、屋宇人馬、寫し得て巧緻を極め用筆、袁氏の一派に屬す、郭熙を倣へる作なり。上
方に小楷書の題識あり、凡そ數百字、「東柯李寅記」に款し李寅印、叩口陬の二印を鈐せり。題
識の一節に曰はく「獨惟夫後之論畫者、鄙精密而尙疎畧、至艸艸者、如元之倪元鎮、黃公望、筆
如爛麪、墨如突煙、沙猶臥蚓、岫若攢墳、幾不可問矣。誠如其說、則晉之顧陸、唐之吳闓、宋之
李范、以精密之法、反降而爲陋、是倪黃獨壇於前古矣」と。古法の爲に萬丈の氣を吐き來る。彼
の無根の樹、朦朧の雲を以て南宗の眞面目を爲す者の爲に、頂門の一針たらずんばあらざる

なり。

桐蔭論畫に云はく「李寅の畫は唐宋を法とし、其の精密を極めたれども、毫端に卷軸の氣無く、
布墨用筆の間に、往往畫史の俗態を脱せず。功力深しと雖も秀韻足らず」と。然ども徒に秀韻
を逐ひて西塗東抹し、畫を成さざるものに比すれば、吾は寧ろ李論に與みせんのみ。

李山松下高士圖立軸

高五尺

闊二尺九寸五分

絹本

老松の下、石坡の側に長髯の高士あり、一童を従へ逍遙す。人物の描寫極めて高雅。傅彩亦清
澹にして人目に可なり。「乙酉桂秋寫、樵谷李山」に識款し、紫琅李山字一桂號樵谷之章の一印
を鈐せり。李山は錢塘の人、未だ其の傳を詳にせず、その乙酉は蓋し康熙四十四年なり。名聲
世に高からずして、能手斯の如きものあり、畫苑の伯樂、今在りや否や。

